

# Jakob Böhmes Leben und sein Gedanke

Yasuo OKAMURA

Jakob Böhme lebte in der ereignisvollen und verworrenen Zeit nach der Reformation (1575-1624). Er ist auch ein Sohn seiner Zeit und Umstände, und sein Gedanke steht natürlich unter dem Einfluß derselben. Jeder Gedanke soll nun Anregungen seiner Zeit und auch Bedingungen seiner Geburts- und Wachstum-Orten empfangen. Ohne dieselbe besteht er überhaupt nichts. Aber er soll auch als allgemeiner alle Zeiten und Orte durch lebendig und gültig sein. Die Anziehungskraft vom Jakob Böhmes Gedanke ist jetzt noch stark und entzückend. Sie geht durch alle Zeiten und Länder, also auch ist sein Gedanke als allgemeiner überall empfangen.

Jeder Gedanke hat überhaupt spezifische und allgemeine Aspekte. Jakob Böhmes Gedanke macht auch keine Ausnahme. Er bricht besonders auf seiner mystischen Seite seine christliche spezifische Elemente durch und hat eben auch einen Berührungspunkt mit dem Buddhismus, vor allem durch seinen letzten Begriff "Ungrund", der als "Nichts und Alles" sehr spontan und dynamisch ist und durch den eine neue Dimension bei der unmittelbaren mystischen Empirie geöffnet wird. Aber auf der andern Seite ist sein Gedankengang sehr christlich und spezifisch und auch durch seinen Lebenslauf bedingt. In dieser Abhandlung wird die letztere Seite nun behandelt und durch diese wird die erstere wieder noch gesucht und gedacht.

Böhmes Lebens- und Aktivitätsbezirk ist nicht so weit, vielmehr nur in Oberlausitz, Schlesien, Böhmen und Sachsen begrenzt. Diese Gegenden nach der Lutherischen Reformation waren eben in dem Schmelztopf der Unordnung. Dort kämpften alte und neue Mächte einander um die politische und religiöse Herrschaft. Besonders Görlitz, wie die andere Städte in Oberlausitz, lag zwischen der Herrschaft des sächsischen (protestantischen) Kurfürsts und der des (katholischen) Kaisers vom Habsburg, und mitten in dem Kampf um eine Machtstellung beider. Böhmes religiöse Stellung und sein Gedanke stehen natürlich auch unter dem Einfluß dieser Umstände. Aber seine Vortrefflichkeit ist darin, auf jeden Fall nicht immer zu wanken und schwingen. Sein Sagen und Schreiben ist durch und durch gleich und also konsequent. Nämlich durch jede Situation sagt er immer das gründliche Gleiche, und um dieses evolviert sich sein Gedanke immer weiter und tiefer. Diese Evolution ist nicht gerade, sondern spiral. Durch diese spirale Evolution bricht sein Gedanke seine spezifische Dimension durch und öffnet immer gründlichere und allgemeinere.

## ヤーコプ・ベーメの生涯と思想

岡村 康夫

### はじめに

一人の宗教家の思想を理解しようとする時、特にそれが時と所とを遠く隔てたものであればあるほど、その特殊性を超えた思想の普遍性に着目するということは当然のことであろう。ただし、もう一方でその思想が生まれた時代や場所を無視してそれを語ることも不可能である。その思想が語られた時や所は或る決定的意味を持っている。その特殊性を等閑に付して、その思想について語ることは、ある場合には大きな誤解に繋がることもある。しかし、また逆にその特殊性にのみ眼を奪われていると、その思想のもつ普遍的意義が見失われる危険性がある。そういう意味で、一つの思想を理解するうえでは、その普遍性および特殊性のいずれにも偏らない総合的接近・追究が必要である。

ヤーコプ・ベーメ (Jacob Böhme; 1575～1624) の研究に関して言えば、他の西洋の哲学者や宗教思想家達に比して決して量的に多いとは言えないが、現在までのところ多角的視点から研究が進められて来ている。それはそのまま彼の思想の潜在的豊かさを表わすものとも言えるが、その主な研究視点を挙げると、①文献学的研究、②伝記的研究、③神学的研究、④文学論的研究、⑤哲学的研究、⑥言語論的研究である<sup>1</sup>。

①に関して言えば、ベーメ当時の漸く緒に就いた出版事情も絡んで、ウェルナー・ブデッケに始まる綿密で地道な原典研究およびその周辺の手紙や市役所等の公文書の文献学的研究が現在も続けられている<sup>2</sup>。②に関しては、先ずベーメと同時代の最も古いアブラハム・フォン・フランケンベルク (1593-1652) による一種の伝説的な伝記研究が挙げられる<sup>3</sup>。これに対して、現在までのところリヒャルト・イエヒト<sup>4</sup>に代表される堅実な郷土史的研究を基礎にして、ベーメが実際に足跡を残した地域、すなわちオーバースラウジッツ (Oberlausitz) やシュレージエ



ベーメ像 (ゲルリッツ)

ン (Schlesien) 及びそれを取り巻くザクセン (Sachsen) やベーメン (Böhmen) の政治・社会情勢の分析を含めた研究が進められている<sup>5</sup>。③の主な研究にはハイน์リッヒ・ボルンカームに代表されるルター思想との関係性を明らかにするものがある<sup>6</sup>。ただし、ベーメ思想はカスパー・シュヴェンクフェルト (Casper Schwenckfeld; 1489-1561) やパラケルスズ (Paracelsus; 1493-1541) の思想あるいはユダヤ神秘主義であるカバラ (Kabbalah) 等との関わりもあって、単純にキリスト教的神学論争で片付けられない側面があることは確かである<sup>7</sup>。④の研究は特にティーク (Ludwig Tieck; 1773-1853) やノヴァーリス (Novalis: Friedrich von Hardenberg; 1772-1801) 等のドイツ・ロマン主義者に与えた影響やミルトン (John Milton; 1608-1674) を通してイギリス文学へ与えた影響を考究するものがある<sup>8</sup>。⑤の研究は、ベーメが「ドイツの哲学者」としてヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel; 1770-1831) やシェリング (Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling; 1775-1854) によって取り上げられたことに端を発し、西洋形而上学に新たな思索の源泉を与えるものとして注目されて来たものである<sup>9</sup>。⑥の研究は、現代的な言語理解の危機の只中であって、ベーメのいわゆる「自然言語」に着想を得て、創造的言語理解に道を開くものとして今後一層研究が期待される分野である<sup>10</sup>。<sup>11</sup>



Anſicht von Görlitz von Oſten 1575. — 6. View of Goerlitz from the East 1575.

ベーメ在世当時のナイセ河東岸から見たゲルリッツ (オーバーラウジッツ図書館蔵)

ところで、以上の多角的研究は先に述べた特殊性と普遍性との問題をそれぞれ

れの仕方内で包していると考えられる。今回、拙論では特に②の研究分野に焦点を当て、ベーメが生きた時代や地域、あるいは彼の社会や政治等との関わりから再度彼の思想のありかを探りたいと考える<sup>12</sup>。というのは、これまでの拙論<sup>13</sup>で明らかにしてきた神・世界・人間に関する彼の構想は、同時に特殊限定的な彼の個人的生い立ちに発し、さらに彼がそこで生き死んだ時代や地域との深い関わりをもつものだからである。従来は特にベーメ思想のもつ普遍性について考究してきた。すなわち、彼の思想の深みは彼の生きた時代や場所の限定性や、さらにはキリスト教的特殊性を破るものすらもっており、その点を特に「無底 (Ungrund)」や「神の戯れ (Gottes Spiel)」という概念を中心に取り出そうとしてきた。そして、今回は逆に彼の生きた時代や場所に焦点を絞り、その特殊・限定性から彼の思想の普遍性の端緒を再確認したいと考える。

さて、彼が生きた時代はまさにマルティン・ルター (Martin Luther; 1483-1546) による宗教改革後の混乱期にあった。その混乱には純粋な信仰問題だけ



ヴィッテンベルク城

には終わらない複雑な政治・社会情勢が絡んでいる。ルターの宗教改革そのものもそうであったように、またそうであったからこそ、その後の三十年戦争に繋がるドイツを舞台にした政治・社会情勢の破壊的混乱が生じたのである。また、この点は第1章で詳論するが、ベーメが生きた地域は、カトリックを奉じる

ハプスブルク家とルター派を自称するザクセン選帝侯との力の狭間であって、しかもなお当時はルター派からも認知されていなかったカルヴァン派と言われる勢力にも一時占拠されたところであった。したがって、そこは宗教的にも政治的にも新旧相乱れた混乱の坩堝にあったと言える。そして、ベーメの手紙にはまさにそのような混乱した時代と地域を目撃証言が残されている<sup>14</sup>。拙論は、そのような時代背景やベーメの生涯を明らかにすることを通して、彼の思想の意義を再確認することを目指すものである。

## 第1章 ベーメの生きた時代

ヤーコプ・ベーメの思想を探る手掛かりは勿論第一に彼自身の書いた著作の



ヴィッテンベルク城教会

うちに求めるべきであろう。ただし、彼がその思想を展開する文脈およびその思想的淵源については、彼自身の生い立ちや受けた教育、生業等も深く関わって、彼自身の著作からそれを確定することは極めて困難である。後ほど詳しく述べるが、彼にはもともと農民の出であり、またその虚弱な体質の故に靴職人という生業を選ばなければならなかったという個人的事情があった。そのような経歴・事情から、彼は当時の知識人達が受けた人文主義的教育からは程遠いところにあり、本質的には自己陶冶をせざるを得なかった境遇にあった。しかし、後に述べるように彼の良き理解

者であった人々は、感性豊かで社会的影響力をもつ医者や貴族たちであり、また時代を先取りする知識や教養をもっていた。ベーメは彼等との活発な交際のなかで、様々な知識を得、その経験を膨らませていったのである。イエヒトが述べるように、彼もまた時代の子であり、彼の思想は極めて個性的であるが、しかも多くの糸によって彼の時代と繋がっていたのである<sup>15</sup>。

ところで、以上のような意味で彼が置かれた時代状況を探る手掛かりとしては、彼の著作以外には彼自身と彼の信奉者たちが書き残した手紙、あるいは彼の同時代の人やさらには彼の敵対者たちが残した書き物等がある。また、当時の市当局や彼が属していた靴屋の組合の公文書等が極めて重要な手掛かりとなっている。ここでは、これらの手掛かりを基に文化的観点からベーメ研究をしたエルンスト＝ハインツ・レンパーの業績を中心に、再度彼の生涯と思想に迫ることを試みたい。<sup>16</sup>

### 第1節 宗教改革後の動向

さて、ベーメが生きた時代（1575～1624）を検証するに先立ち、先ず考察しなければならないのはマルティン・ルターに始まる宗教改革運動である。1517年10月31日、ルターはヴィッテンベルク城の教会の扉に95の提題を貼り

出したと言われている。それは当時「商取引にまで頹落」していた贖宥制度に対して、ルターがラテン文で認めた「贖宥の効力を明らかにするための討論」95ヶ条であった<sup>17</sup>。それはもともと学者の討議を求めるために中世以来慣行として行われていた穏当な方法であり、ルター自身その後のその波紋の大きさを予測していた訳ではない。しかし、それは結果として「いろいろな方面に向けて送られ、書き写され、小さな版や、掲示用の大きな版に印刷され、ドイツ語に訳され、読まれ、論じられ、読めない人々のために朗読され、スローガンとして引用された」。それはルター以前に「全世界が贖宥を非難していたからである」<sup>18</sup>。この1517年に始まったと言われる マルティン・ルターの宗教改革は、その後のドイツの歴史、延いてはヨーロッパの歴史に善くも悪くも決定的意義をもつことになった。



ヴィッテンベルク城教会の扉

さて、ルターの「95ヶ条の提題」に端を発した改革運動は、彼自身の思惑がいかなるものであったにせよ、社会的・政治的に大きな波及効果をもたらした。その一つがトーマス・ミュンツァー（Thomas Münzer; 1489-1525）の先導した「終末論的信仰に基づく革命思想」<sup>19</sup>であった。それはドイツ農民戦争へと発展したが、農民達の無軌道な破壊と略奪行為の結果、逆にルター自身も黙認をせざるを得なかったような諸侯による徹底した弾圧へと繋がった。その間の事情はルターの書き遺した文書にも明らかである<sup>20</sup>。ミュンツァーはルターとの対決のなかで「聖霊の直接的な体験」<sup>21</sup>に基づく過激な社会変革の思想を展開した。それは一方ではルター以上に直接的な神秘体験に基づく信仰の立場を主張するものであると同時に、他方ではその直接経験への固執のゆえに一切の権威を拒否し暴力行使をも容認する過激な革命思想ともなったのである。

農民戦争の急進的で暴力的な社会改革の頓挫と並行して、ルター教会はその根源的革命的爆発力を失い、「封建政治の道具」となっていった。このような改革の趨勢において、ドイツの封建体制を取り除く試みは挫折し、むしろ逆にルター派の改革に対する失望感が広まることとなった。レンパーは、このような状況のなかで、当時既に萌しつつあった「市民的人格理想と反封建的民主主

義的人文主義」とが自己分節するために「神秘主義」へと向ったと考えている。彼はまた、その文脈のなかでパラケルズスやヴァレンティン・ヴァイゲル (Valentin Weigel; 1533-1588) 等の名を挙げ、特にその頂点にヤーコブ・ベームを置いているのである<sup>22</sup>。

ベームの思索世界は、確かにレンパーの言うように、「ドイツにおける宗教改革の結末に対する抵抗」<sup>23</sup>と見ることもできる。それは例えば、彼が手紙のなかで述べている「新しい改革 (die neue Reformation)」や「大いなる改革 (die grosse Reformation)」<sup>24</sup>という言葉からも窺い知ることができる。当時既に、宗教は強権的政治的弾圧への口実を与えるものとなっており、またその改革そのものが反民主主義的・封建的に硬化していた。このような趨勢のなかでベームは、旧来の教会体制への批判として始まった筈の新たな体制への更なる批判を続行し、改めて「キリストへの道 (der Weg zu Christo)」を説かねばならなかったのである。ただし、それはもはや単なる中世的禁欲的神秘主義ではなく、「神の道具 (Gottes Werkzeug)」<sup>25</sup>として、この地上でキリストとともに苦しみを受ける意志的神秘主義の立場であったと言える。

硬直化したプロテスタント主義の捉えた「人間 - 教会 - 神の関係」は、ルネッサンスと人文主義によって生じた「個々の人間の再評価」と矛盾した。すなわち、封建体制に対する市民的人間の価値意識は、もはや教会制度によって媒介された関係ではなく、「直接的な人間の神への関係」を要求したとも言えるのである。それは当時勢いを増しつつあった市民階級の力に応えるものであり、中世的受動的態度ではなく、積極的に人間の自由意志を認める時代の趨勢に沿ったものであった。ルターの当初の封建体制を揺るがす革命的な認識は、ベームの登場する百年後には既に反動的で発展を妨げる教義へと歪められていた。ベームは「直接的靈的再生」によって再度神との関係を取り戻し、そこから質的に新しい世界像を再興し、そういう意味での宗教改革の根本的完成を成し遂げようとしたのである。<sup>26</sup>

## 第2節 オーバーラウジッツの政治的・経済的状況

ベームは三十年戦争とその結果として故郷の街ゲルリッツにおいても忘れ去られ、一時はその墓標すら確認できない状態にあった<sup>27</sup>。そして、街と特にその教会当局はベームを不当に取り扱って来たが、1682年にヨハン・ゲオルク・ギヒテル (Johann Georg Gichtel) がアムステルダムで最初のベームのドイツ語版全集を編纂して以来、ドイツでも急速に見直されることになった。さらに、

その後ヘーゲルやシェリング、フォイエルバッハ等もバーム思想の根本的意義に言及した。また、特に先述したイエヒトの1924年に発表した研究は、1600年当時のゲルリッツの政治的・社会的・経済的・文化史的状况を、バームの伝記のなかに書き入れたものとして注目に値するものである<sup>28</sup>。拙論では、先述したように、このようなイエヒトの研究を踏まえて更に研究を深めたレンパーの研究を中心にバームの生涯と思想について考察したい。

以上述べたように、ドイツさらにはヨーロッパ全域を巻き込んだ宗教改革の大きな流れのなかでバームの思索を考察すると同時に、ここではさらに詳しい地方史のなかでバームの生涯とその思索の展開について考究したい。後に詳論

するが、バームは1575年にアルト・ザイデンベルク村に生まれ、1624年にゲルリッツで亡くなっている。その50年に満たない一生の間に、レンパーの述べるように、彼は靴屋の親方として14年間そして8年間は行商人として家族を養っていた。そして、その傍らで彼が実際著述活動に携わったのは12年間位であ



現アルト・ザイデンベルク風景

り、特にその最も旺盛な創作活動は最晩年の1618年から1624年の数年に集中している。また、その間に彼が書き残した手紙はそれらを補完し裏付ける自伝的報告書となっており、当時彼を駆り立てていた精神的衝動と彼を取り巻く時代的・社会的状況を色濃く反映している。それらは「神智学的書簡(Theosophische Send=Briefe)」<sup>29</sup>としてまとめられ、彼の思索の展開のみならず、その源泉を探る大きな手掛かりとなっている。<sup>30</sup>

さて、後に述べるようにヤーコプ・バームが靴匠としてゲルリッツの市民権を獲得したのは1599年4月24日であった<sup>31</sup>。その当時、ゲルリッツを含むオーバーラウジッツ地域は、カトリックを奉じるハプスブルク家とルター派を自称するザクセン選帝侯との間の緊張を孕んだ状況下にあった。そこには新旧勢力の経済的・政治的思惑も絡んで複雑な拮抗関係が出現することとなった。バームの生活と活動を考えるためには、先ずこのオーバーラウジッツの特殊な歴史的・政治社会的状況を踏まえなければならない。

その当時、ゲルリッツは半世紀前より自立的商業活動を行い得ない状況に追い込まれていた。それは16世紀の初めの頃以来のベーメン地方におけるハプスブルク家の台頭により、オーバーラウジッツおよびニーダーラウジッツ地方が当家のものとなったことに起因する。その頃すでにプロテスタント派の影響下にあったゲルリッツは、突然、ハプスブルク家の反宗教改革的指導的力のもとに置かれることになった。



ゲルリッツ市街（遠景ランデスクローネ）

そこから生じた混乱は、シュマルカルデン戦争（1546/47）に際してハプスブルク家からの武器援助の要求に対して遅延するという形で顕わとなった。シュマルカルデン戦争は、まさにプロテスタント諸侯がハプスブルク家の全遺領を相続した皇帝カール5世（1500～1558、神聖ローマ皇帝位1519～1556）に抵抗しようとしたものであった。しかし、それは結局皇帝軍の圧勝に終り、その結果、武器支援を遅延したオーバーラウジッツの街々は高額の新負担を強いられ、政治的・経済的に大きな打撃を受けることになったのである。<sup>32</sup>

当時、ゲルリッツは毛織物の取引を主要な産業としていたが、それはその高額の新負担に加え、東方のトルコの侵略により、バルカン半島やハンガリーの市場を失うという打撃も受けていた。ベーメが生業として選んだ靴関係の仕事も軍隊装備の需要から盛んであったが、紡ぎ糸や革は投機の対象となり、価格が吊り上げられた。また、軍隊を維持するために悪貨が流通し、貨幣価値が下がり、物価が上昇した。また、この状況に追い討ちをかけたのがペスト禍であった。1568年当時のゲルリッツの人口は凡そ一万人位であったが、その4分の1がペストに罹患したと言われている。このような状況下で、ゲルリッツは政治的・経済的に疲弊していたのである。<sup>33</sup>

### 第3節 オーバーラウジッツにおける宗教改革

さて、ルターによって発信された宗教改革の動きは、オーバーラウジッツや

それに隣接する地域であるシュレージエンやバーメンにも波及した。ただしそれは、この地域の特徴として、君主による「上からの宗教改革」としてではなく、庶民層からの要求に応える「下からの宗教改革」として浸透した。そして、それは特にゲルリッツにおいては、庶民層からの強い要求による「教会制度の改革」として容認されることになった。それがあからさまな革命を回避するためにオーバーラウジッツの街々の参事会が取った施策であった。ただし、このような策を取り得た背景には、先に述べた新旧勢力の狭間において、教会の要件については町の参事会等の自由裁量で執行できたということがある。これはオーバーラウジッツの教会事情にとって特徴的なことであり、その結果、宗教改革の導入時およびその後も過激な偶像破壊は起きなかったのである。<sup>34</sup>



聖ペーター教会（ゲルリッツ）

このような特殊な状況下においてオーバーラウジッツの教会政策は比較的寛大であった。それが隣接するシュレージエンとの関係もあって、いわゆる異端的な神秘主義的傾向を許容する温床を育てたとも考えられる。この地域でルターの宗教改革の動きを鋭敏に受け留め、ルター派が当初の求心的信仰運動を見失っていくなかで、あくまで「魂の照明（die Erleuchtung der Seele）」にのみ支えられた宗教改革を主張し続けたのが、カスパー・シュヴェンクフェルトである。彼は極めて個人主義的な宗教改革の理念を掲げ、「直接的霊的再生」に基づく無教会的なキリストの福音を述べ伝えようとした。このようなシュヴェンクフェルトの教えは、この地域の庶民や農民並びに人文主義的教養人にも影響を与え、バーメンもおそらく特にその修業遍歴時代にそれに接し、大きな感化を受けたと考えられている。<sup>35</sup>

このようなオーバーラウジッツやシュレージエンにおける動きに対して、先に述べたように、この地域の統治権を主張するハプスブルク家は早くから反宗教改革の旗を掲げ、プロテスタント派を封じ込めようとしていた。それはカール5世がヨーロッパ全域に及ぶハプスブルク家の遺領を相続したことに端を発し、その後を継いだ皇帝もその統一の絆としてローマ・カトリックを必要としたからである。それはバーメンに始まり、先に述べたようにシュレージエンやオーバーラウジッツへも及ぶことになったのである。ただし、ハプスブルク家

側もヨーロッパ各地に及ぶ戦費調達に苦慮し、特にオーバーラウジッツ地域を抑えるために、ルター派のザクセン選帝侯を調停者として立てたことによって事態は一層複雑となる。<sup>36</sup>

ところで、プロテスタント派の勢いは16世紀終り頃にその頂点に達していたが、その内部不統一のために必ずしも反宗教改革の動きに対して結束していた訳ではない。それは特にカルヴァン派のプファルツ選帝侯と上述のルター派のザクセン選帝侯との間の反目に顕著に現われる。ただし、旧教側が攻勢を強めるなかで、新教側はプファルツ選帝侯のフ



三十年戦争当時の甲冑（ゲルリッツ）

リードリッヒ5世（在位1610-23）を中心にして一応結束することになる。これに対して旧教側もバイエルン公を中心に対抗し、その緊張関係が際立つことになる。それに加えて新教側にはフランス、イギリス、オランダが、旧教側にはスペインとローマ教皇が付き、ドイツ内の対立がヨーロッパ列強の介入を受けることになる。<sup>37</sup>

いわゆる三十年戦争（1618-1648）は1617年にベーメン王になったハプスブルク家のフェルディナント2世（在位1619-1637）がこの地域において強引な反宗教政策を始めたことに端を発したと言われる。ベーメンの議会は先のプファルツ選帝侯フリードリッヒ（ベーメン王位1619-1621）を立て対抗しようとしたが、結局彼は旧教側の軍隊に敗れてしまう。それは一つには上述した新教内における不統一にも起因する。その後、この戦いはデンマーク軍やスウェーデン軍等の介入により、国際戦争に拡大した。この戦争は、ここでは詳論は避けるが、最終的には主にフランスの強力な介入による1648年のヴェストファーレン条約によって決着を見たと考えられている。そして、それは結果的には、ハプスブルク家の没落とそれに伴う皇帝権力の打破およびドイツにおける領邦国家化をもたらしたと言われている。<sup>38</sup>

さて、ベーメは1619年の手紙のなかで、先のカルヴァン派のプファルツ選帝侯フリードリッヒ5世のプラハ入城について報告している<sup>39</sup>。ただし、上述したようにフリードリッヒ5世は1620年11月にはヴァイセンベルクの戦いでカトリック側の軍隊に敗れ、ベーメン地方の支配を失うことになるが、その同じ

年の9月、彼の同盟者であったイエーゲンドルフがオーバーラウジッツに入り、そこに半年間駐留し、ゲルリッツの街にも軍隊の宿営や軍税を課した。皇帝側はこのイエーゲンドルフの軍を先のルター派のザクセン選帝侯との同盟において駆逐することに成功する。しかし、先述したようにハプスブルク家はその戦費を支払うことができず、ラウジッツ地域は抵当としてザクセン選帝侯ヨハン・ゲオルク1世に差し出され、結局1635年にはザクセンへ帰属することになった。このようにしてオーバーラウジッツは、カトリックとプロテスタントとの対決構図が、プロテスタント内部の覇権争いと絡んで屈折した政治的・宗教的状况下に置かれることになったのである。<sup>40</sup>

ベーメは、その手紙から窺い知ることができるように、オーバーラウジッツよりもニーダーシュレージエン地方に彼の多くの仲間を見出している。それは先に述べたように彼が靴職人としての修業時代にこの地域を遍歴したことに起因すると思われる。この地域にはフス (Johann Hus, 1369-1415) の時代以来、先に挙げたカスパー・シュヴェンクフェルトに代表されるような宗教改革からの分離派を産む土壌があったと考えられる。ベーメの時代にはここにはルター派の教会に対抗するカルヴァン派の教会があり、ルター派の牧師はカルヴァン



シュレージエンの城 (現ポーランド)

派の宮廷聖職者や宗教局の下に置かれるという状況にあったと言われている。このような宗教的風土から、信者は教会組織から離反し、聖書を個人的に解釈し、更には神秘主義へと傾く趨勢が生まれたと考えられるのである。<sup>41</sup>

さて、このような宗教風土をもつシュレージエンに隣接するオーバーラウジッツにおける信仰上の争いは、先の政治的関係も絡んで、微妙な駆け引きをせざるを得ない状況に追い込まれることになる。それが後に詳しく述べるゲルリッツの首席牧師グレゴール・リヒターとヤーコブ・ベーメとの対決の遠因であると考えられる。この点を明らかにするためには先ず、ルターの死後生じたルター派とカルヴァン派との対立に遡及し、そこで問題となった所謂「隠れカルヴァン主義 (Kryptocalvinismus)」に言及しなければならない。<sup>42</sup>

ルター（1483-1546）の死後、宗教改革は人文主義者フィリップ・メランヒトン（Philipp Melanchton, 1497-1560）に託される。その彼が引き受けた大きな課題の一つがルターとカルヴァンとの間の信仰上の対立の調停であった。1555年にアウグスブルクの宗教講和が結ばれ、カトリックとプロテスタントとの政治上の調停が一応実現されるが、そこで公認されたプロテスタント派の教えはあくまでルター派のそれであった。メランヒトンはルター派のなかでも穏健派に属し、カトリックやカルヴァン派との調停役にも当たっていたが、ルター派の過激派からも攻撃される立場に追い込まれ、「隠れカルヴァン主義」と誹謗されることになる。<sup>43</sup>



メランヒトンの家（ヴィッテンベルク）

この「隠れカルヴァン主義」の問題が上述したようにリヒターとベーメとの対決の構図に影響することになるのである。オーパーラウジッツ地域は、宗教改革前はハプスブルク家の影響の強いプラハの大司教区ではなく、マイセンの司教区のもとにあった。このマイセン司教区の管轄下で執られた教会体制は、ハプスブルク家との緊張を弾力的に保つために微妙な調節機能を果たしていた。すなわち、ルター派が「聖書のみ」に基づいたいわゆる「万人司祭説」を事実上放棄し、新しい職業聖職者を認めていくなかで、マイセン司教区の管轄者は1559年と1586年との間にバウツェンでカトリックとルター派の聖職者をその官職に就けるということを実施しているのである。<sup>44</sup>

このようにルター派が「新しい権力装置の一つの構成要素」となっていく情勢のなかで、「純粋な教え」についての烈しい争いが生じ、その波紋がゲルリッツの歴代の首席牧師の審問へと繋がるのである。1566年にはゲルリッツの首席牧師であったダニエル・ヤウフ（Daniel Jauch）は、いわゆるカルヴァン派的説教のために、その職を放棄しなければならなくなった。さらに1592年にはゲルリッツの代表者たちがバウツェンに呼ばれ審問を受けている。そのなかには参事会の代表者としてバルトオロモイス・スクルテトゥス（Bartholomäus Scultetus: 1540-1614）、ギムナジウムの教員の代表として当該のグレゴール・リヒターも含まれている。この時の審問は順調に終わったようであるが、

1602年にはさらに大掛かりな審問が行われ、ゲルリッツの首席牧師であり、ベーメにも感化を与えたと考えられるマルティン・モラー<sup>45</sup> (Martin Moller; -1606) が「隠れカルヴァン主義」の嫌疑で審問されている。この係争はモラーの死 (1606年) で事実上終わるが、ベーメもこの出来事を間近で見聞していた。モラーはスクルテートゥスに代表されるゲルリッツの「自由な (liberal)」気風に守られ、その死まで職に留まることができた。そして、このような状況下でグレゴール・リヒターが1606年にゲルリッツの首席牧師の職に就くことになるのである。後に詳論するリヒターのベーメに対する批判は、先ず以上のようなオーバーラウジッツに屈折した仕方でも波及していた宗教改革後の大きな流れのなかで把握すべきものであり、従来考えられてきたような単なる個人的痴言・誹謗に終わらない要素を含んでいたと言うべきである。<sup>46</sup>

#### 第4節 ゲルリッツの人文主義的雰囲気

ベーメの生きた時代は大きな時代の転換期であり、それに先立つ16世紀半

ば以来、現存の世界秩序への疑いが広まりつつある時代であった。その疑いとは先ず、既存の封建体制の崩壊に伴い新たな絶対主義的社会体制が築かれ始めていたのであるが、その築かれつつあった新たな社会体制そのものへの疑いであった。それから次にそれは、宗教改革によって新たな信仰告白がもたらされた



ヴィッテンベルク大学

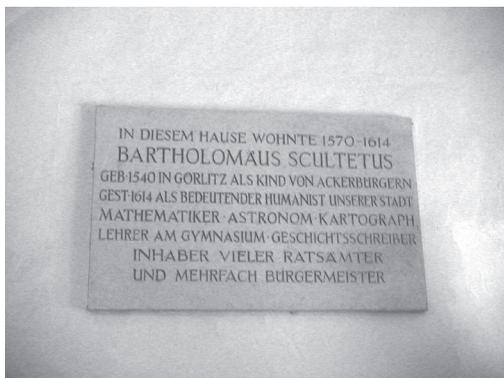
のであるが、その改革の帰結によって更に深められたキリスト教的信仰告白への疑いであった。このような屈折した時代状況のなかで従来の世界観への疑いが更に深まっていったと考えられる。従来の世界像や世界観は主にキリスト教を中心にして構築されてきたものであるが、それはルネッサンス以来、その人文主義的発想によって崩され、学と信仰との間には裂け目が開いていた。周知のように、太陽中心の宇宙体系を数学的に証明したニコラウス・コペルニクス (Nikolaus Kopernikus; 1473-1543) や更にその宇宙観を裏付けたガリレオ・ガリレイ (Galileo Galilei; 1564-1642)、ベーメの同時代人でもあり、後に述べ

るようにゲルリッツを訪れたこともあるヨハネス・ケプラー (Johannes Kepler; 1571-1630) 等の登場が、その当時の時代の雰囲気象徴している。<sup>47</sup>

前節で述べた宗教改革後の諸事情と同様に、あるいはそれ以上にベーメの思索に影響を与えたものとして考察すべきものは、当時の知識人たちの思潮である。上述したようにベーメの理解者のなかには、時代の先駆けをする知識人たちが含まれていた。彼の著述の中にも当時の自然哲学や錬金術、占星術、天文学等の知識が散見される。このような知識を受け入れ、それを神秘主義的経験を核に再構成する思索を可能としたのは、勿論ベーメ自身の極めて卓越した能力に拠るものである。ただし、それはまた彼を取り巻くゲルリッツの雰囲気がかなり自由であったことにも大きく起因するものであったと考えられる。

さて、1565年にはゲルリッツでギムナジウムが創設され、その最初の校長としてヴィッテンベルクで人文主義的教養を身につけた学者であるペトルス・ヴィンケンティウス (Petrus Vincenius) が着任している。後に述べるように

ベーメの息子たちもこのギムナジウムへ通うことになるが、まさにこの学校が街の新しい精神の担い手たちを育成したと考えられる。バルトゥロモイス・スクルテートゥスは後にゲルリッツの市長となり、ベーメとリヒターとの係争に直接関わった人物でもあるが、彼は数学者、天文学者でもあり、このギムナジウム



スクルテートゥスの家を示す標識 (ゲルリッツ)

に深い関わりをもっていた。例えば、彼はグレゴリー暦の改正に携わったり、マイセンやオーバーラウジッツの地図を作成したり、彗星の研究にも携わった学者であった。また、ヨハネス・ケプラーは彼の友人であり、1607年の4月26日から5月1日までゲルリッツに滞在したという記録もある。このように、人文主義的なギムナジウムの創設や当時の人文主義者の代表者であるスクルテートゥスが市長となるような自由な気風がゲルリッツの街にあったのである。<sup>48</sup>

さて、またスクルテートゥスは、パラケルズスの思想に敬意を懐いており、その日記の記載からも当時のパラケルズス主義者との結びつきが確認されるような人物であった。パラケルズスは哲学者であると同時に、錬金術師、自然研

究者、医者であったとも言われ、スコラ神学に対して世界や自然について思索する新たな材料を与えた人物であった。その思弁的自然哲学にスクルテートゥスは大きな関心を懐いていた。というのも、当時はまだ宇宙は「生きた自然力の混沌とした作用の場所」に過ぎず、スクルテートゥスに代表される人文主義者たちは、その本質をパラケルズ的諸表象の助けを借りて暗示しようと努めていたのである。ベーメの著作のなかに見られる錬金術的・自然哲学的表象は、これらの人文主義者たちの影響に由来するものと考えられる。<sup>49</sup>

パラケルズ主義的素養をもつ人文主義者の一人でスクルテートゥスと並んでベーメに影響を与えたと言われるのがバルタザール・ヴァルター (Balthasar Walter) である。彼はリークニッツ (Liegnitz、現ポーランド) 出身の医師にして錬金術師であり、最初にベーメに「ドイツの哲学者 (Teutonicus Philosophus)」の名称を与えた人物である。彼は1587年と1588年にはスクルテートゥスを訪問している。また、フランケンベルクによると、彼は三ヶ月間ナイセ河の橋の袂のベーメの家に滞在したことがあると述べている<sup>50</sup>。彼はヨーロッパは勿論、アフリカやアジア等の世界各地を旅行し、経験豊かで博識であり、最後はパリで亡くなったと伝えられている。また、1620年頃、彼はドレスデンの宮廷実験所を指導していたと言われている。彼の後継者がベネディクト・ヒンケルマン (Benedikt Hinkelmann) であり、後に述べるように1624年にはベーメもこのヒンケルマンのもとを訪れている。ヴァルターがその世界各地を訪れた経験と博学とによってベーメに多大な刺激を与えたことは疑い得ないが、彼の功績は何よりベーメの思想を北ドイツやパリへと伝え、「ドイツの哲学者」の喧伝者となったことにある。<sup>51</sup>

以上のように、1600年前後のゲルリッツは、スクルテートゥスに代表されるようなパラケルズ主義的人文主義者たちを引き寄せる自由な雰囲気をもった街であった。ベーメの晩年の手紙に登場するアブラハム・フォン・ゾンマーフェルト (Abraham von Sommerfeld)、や先に紹介したベーメの最初の伝記作者となるアブラハム・フォン・フランケンベルクもその一人である。レンパーの指摘するように彼等から影響を受けたと思われる錬金術的表象は特に1621年以降の著作に顕著である。

以上、ベーメの生きた時代を主に宗教改革及びその後の混乱とその自由主義的雰囲気を中心に考察した。そこでは宗教改革は単なる宗教的信条の変更に留まらない社会的・政治的駆け引きを、その背景に持っていることが明らかになっ

た。あるいは、むしろ逆にそういう社会的・政治的情勢の変化の中で始めて宗教改革が可能となったと言うべきであろう。ただし、そのような形で始まり進展した宗教改革は当然ながら、純粋な信仰運動に終わらない宿命を持っていた。従ってまたその後、ベーメが巻き込まれ、彼を駆り立てたものも、彼自身の思いを越えていたと言うべきであろう。確かに、彼がその著作や手紙のなかで述べていることは、彼個人の純粋な思いに貫かれていると言っても過言ではない。そうであるからこそ、彼は彼が生きていた当時も多くの信奉者に恵まれ、またさらに後代においても再評価される機会を得たと言える。しかし、いかなる個人も、程度の差こそあれ、彼が生きた時および所から全く超絶してあることは不可能である。ベーメのような傑出した宗教思想家の場合も例外ではない。次章ではこれらの点を踏まえ、もう一步ベーメ個人の生涯に踏み込んで彼の思想の淵源を探りたい。

## 第2章 ヤーコブ・ベーメの生涯

第1章では、ベーメが生きた時代を中心に彼のような宗教思想家が誕生する時代背景や宗教的風土等について考察した。第2章では、これらの点を踏まえてベーメの生涯とその思想形成について考究したい。<sup>52</sup>

### 第1節 誕生から靴屋の親方となるまで（1575年～1599年）

ヤーコブ・ベーメは1575年、ナイセ河畔の街ゲルリッツの南方、ベーメン国境に近い小村アルト・ザイデンベルクの農民の子として生まれた<sup>53</sup>。そして、その誕生の次に彼に関して公的記録として確認できるものは1599年に彼がゲルリッツの市民権を得て、靴屋の親方としての登録を済ませたということである<sup>54</sup>。その誕生から靴匠としての登録との間の記録はリヒャルト・イエヒト等の研究に拠っても確かなものは存在せず、彼の幼少期から親方として独立するまでの経緯については、先に紹介したアブラハム・フォン・フランケンベルクによる伝記に拠り推測するしかない。ただし、このフランケンベルクの報告も彼自身が書いているようにベーメが晩年（1623年から1624年）に語ったことを、後年（1637年）また彼の記憶に基づいて書き記したものであり<sup>55</sup>、そこに彼の思い入れや脚色が入ることは止むを得ないことでもあろう。例えば、家畜番をしていてゲルリッツ郊外の山ランデスクローネで黄金の宝を見つけたという話<sup>56</sup>

や、徒弟時代に靴を買いに来た「見知らぬ男」から将来についての予言をされ



ランダスクローネ遠景

た等の話<sup>57</sup>については事実としては極めて疑わしく、特にアンドリュウ・ウィークスが述べているように古い伝説や後代のベームに対する評価が大きく影響したことが考えられる<sup>58</sup>。しかし、たとえこれらのことが事実でないとしても、ベーム思想の真価を少しも損なう

ものではない。ここではそういう視点から、第1章で述べた彼が生きた時代背景を念頭に再度彼の詳しい生涯とその思想形成について考究したい。

アルト・ザイデンベルク（現ポーランド領）は、ザイデンベルク近郊、ベームメン（現チェコ領）国境近くに位置する小さな農村である。そこは現在でも田園地帯が広がる閑静な村であり、ベームが幼少期を過ごした村の面影を依然伝えていていると思われる。彼の生まれたところは、クルト・アードラーによる詳しい調査により、ほぼその場所が特定されている<sup>59</sup>。そこでベームの父親ヤコブが所有していた農地は相当量のものであり、決して彼は貧しいと言われる境遇にはなかったと推測されている。

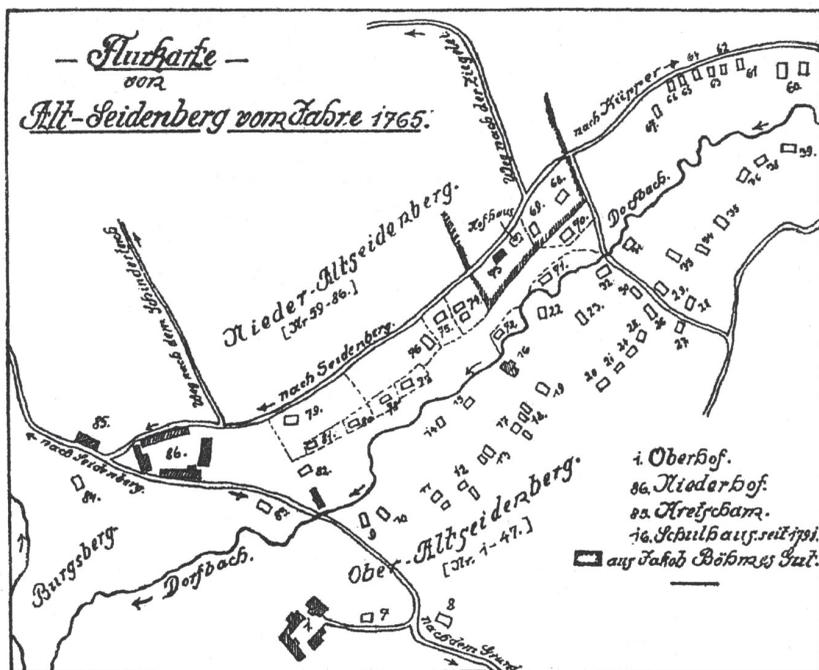


現在のアルト・ザイデンベルク村

その点は彼の父親が村で起る係争の立会人やザイデンベルクの町の教会の世話役を務め、一定の社会的認知を得ていたことから窺い知ることができる。ベームはそういう家庭の五人の子供の第四子として生まれた。ただし、ベームの母のウルズラは1607年2月以前に亡くなっており、父親は1611年以前に二番目の結婚をして、三人の娘を儲けている。また、ベームの兄のゲオルクとマルティンは父親以前に亡くなっており、末弟のミヒャエルが父親の死後1618年

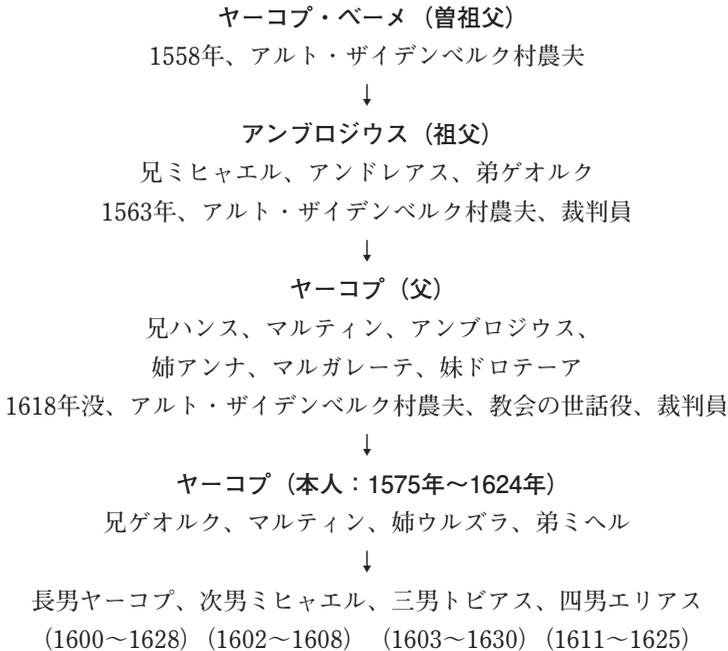
にアルト・ザイデンベルク村の遺産を相続している。<sup>60</sup>

【アードラーによるアルト・ザイデンベルクのペーメ家の地所<sup>61</sup>】



さて、彼がなぜ靴屋を生業として選んだかも推測するしかないが、一つには彼が生来虚弱な体質で農民としての重労働に適していなかったということが大きな要因であったと考えられている<sup>62</sup>。そして、そこから職人としての道は当時の彼に残された数少ない選択肢の一つであったに違いない。彼の手書きの原稿や彼が使用する語彙等は、彼が靴屋としての修業に出る以前にアルト・ザイデンベルク村の学校やザイデンベルクの町の学校で読み書き等の初歩的教育を受けたということを暗示している<sup>63</sup>。いずれにしても、彼はそのような初歩的教育を受けて直ぐに、恐らく1589年（14歳）頃にはザイデンベルクの靴屋の徒弟奉公に出たと推測される。

【ベーム家の系図】<sup>64</sup>



さて、靴屋として一人前の親方となるためには、3年の徒弟時代を経た後に、さらに3年の遍歴修業が課せられる。この6年間の詳細についても殆ど確実な資料はないが、ベームの精神的生長にとって極めて重要な時代であったことは疑い得ない。先に述べたようにフランケンベルクは、徒弟時代に見知らぬ貴族の男が靴を買いに来てベームの将来について予言めいたことを告げた話や、修業・遍歴時代に余りに実直過ぎる彼を嫌ったある親方から追い出された話<sup>65</sup>や、彼の最初の照明体験がこの時代にあったこと等を伝えているが<sup>66</sup>、イェヒトが述べるようにいずれも確たる証拠のない逸話に過ぎない<sup>67</sup>。ただ、彼が遍歴時代にオーバーラウジッツやそれに隣接するベーメンやシュレージエン地域を旅したことは、後の彼の手紙に登場する人々から考えてほぼ確実である。前章で述べたように、当時この地域にはフスの時代以来の宗教的風土の中で、分離派のシュヴェンクフェルトを信奉する多くの人々がいた。彼等との出会いにおいて若く繊細なベームが多大な感化を受けたということは、彼の生涯においてあ

る意味で決定的であったと言える。<sup>68</sup>

さて、フランケンベルクは1594年にペーメは既にゲルリッツへ親方として移り住んだと述べているが<sup>69</sup>、イエヒトの考証によると彼は公式には1599年4月24日に市長バルトォロモイス・スクルテートゥスによって市民権を獲得し、靴匠としての登記を済ませたことになっている。その時間的ずれについてイエヒトは、ペーメは1594年には徒弟としての既定の修業・遍歴を終え、それから1599年の正式登録までゲルリッツで靴屋の職人として働いていたのではないかと考えている。ペーメはその登録を済ませた同日に、彼の姑となる人の義兄弟のヴァレンティン・ランゲ (Valentin Lange) から製靴台を購入している。それから、市民権の獲得は半年以内に結婚することを条件としており、ペーメは1599年5月10日には肉屋の親方ハンス・クンツシュマン (Hans Kuntzschmann) の娘カタリーナ (Catharina, 1625.4.25.-1626.2.19.) と結婚している。そして、同年8月21日にナイセ河畔プラガー通り12 (現ポーランド領) に家を購入している。その後1612年に製靴台を売却するまでの14年間、彼は正式にゲルリッツで靴屋の親方として働くことになる。後の1622年12月10日の手紙では「それで私は長い間、相当の暮らしを送った」<sup>70</sup>と述べている。<sup>71</sup>



ペーメの最初の家

さて、ペーメの家族については、ゲルリッツのペーター教会やギムナジウムの記録等の公文書でほぼ確認されている。先ず、既に述べたように彼の妻のカタリーナは、肉屋ハンス・クンツシュマン娘であった。彼女の母親は旧姓バルトウシュ (Bartsch) であり、兄弟にエリアス・バルトウシュ、姉妹にザラ (Sara) がいた。このザラの夫が先に述べたヴァレンティン・ランゲであり、ペーメは彼から既述したように1599年には製靴台を、さらには1610年には彼の第二の家を購入している。妻のカタリーナは「献身的で控えめで遣り繰り上手」であった。彼女はペーメが死の床にあった時も生計のためにドレスデンとパウツェンに旅をしていたと伝えられている。<sup>72</sup>

また、ペーメには四人の息子がいた。ペーメが、次節で述べる決定的経験をする年は彼の長男ヤーコブ (Jacob, 1600.1.29.-1628.12.13.) の誕生の年でもあっ

た。その長男ヤーコブは長じて金細工師となった。次男ミヒヤエル (Michael, 1602.1.8.-1608.3.) は幼い頃ペストで死亡したと考えられ、1608年以降の記録には登場しない。三男トビアス (Tobias, 1603.9.11.-1630.3.19.) は1613年までゲルリッツのギムナジウムの生徒であったことが確認されている。彼は1624年11月の父の死に臨席している。また父親と同じ靴匠となった末の息子のエリアス (1611.9.4.-1625.11.10) は14歳2ヶ月でペストで死亡した。<sup>73</sup>

以上が彼の家族であったが、妻の死もペストであった述べられており、ペスト禍は彼の家族にも例外なく襲いかかっていたことが窺がえる。ただ、ベーメの生前に亡くなったのは次男ミヒヤエルのみであり、これらの家族を守るために、また彼等に支えられて靴屋や行商等を営んでいたということがベーメの生涯の重要な一面であったことも見逃すことはできない。その点は特に晩年のドレスデンからの彼の手紙の中から知ることができる。そこには彼の妻への伝言や息子ヤーコブやエリアスへの言及などがあり、そこからは夫としてあるいは一家の長としてのベーメの配慮の息遣いが聞こえる。<sup>74</sup>

## 第2節 決定的経験から『黎明』の世に出るまで (1600年～13年)

ベーメが1599年に購入し、1610年にナイセ河に架かる橋の東口の新しい家に移り住むまで暮した家は、イエヒトが1924年に再発見し、今もその壁面に記念の標示板が取り付けられている。この家は度重なる兵火や大火をくぐり抜け、現在ではヤーコブ・ベーメ記念館となっている。この家でベーメは靴屋の親方として仕事を始め、ハンス・グルンスキーが述べるような「決定的15分間 (Die entscheidende Viertelstunde)」<sup>75</sup>の経験をしたと想定されている。この経験について、ベーメ自身は次のように述べている。



ベーメの最初の家の標識

このような極めて真剣な希求と渴望において(そこで私は激しい障壁に耐え、そこから逃げ出し、それを放棄するよりはむしろ生を賭けようとしたのであるが) 私に門が開かれた。そして、私は15分間のうちに、多年学校にいた場合

より多くのことを見、そして知った。このことを私は驚き怪しみ、何が私に起きたか分らなかった。そして、そのうちに私の心は神の讚美へと向った。<sup>76</sup>



ゲーテ記念館となった最初の家

この経験が「決定的」であるのは、言うまでもなく先ずそれがその後のゲーテの生涯を決定づけたことに拠る。また、さらにそれが「決定的」であるのはその経験が単なるゲーテ個人の内面的経験に留まらず、その域を超えて、「自然の最内奥の根底、すなわち中心」と呼ばれるところへと到ったことによる。フランケンベルクは次のように伝えている。

こうして彼が独力で誠実な職人として額に汗して暮しているうち、17世紀の初まりの1600年、25歳の時、彼は再び神の

光に捉えられ、彼の星の輝く魂の霊とともに、(快い陽気な輝きの) 錫の器の突然の光景を通して、神秘的自然の最内奥の根底、すなわち中心 (der innerste Grund oder Centrum der geheimen Natur) へ導き入れられた。<sup>77</sup>

この「最内奥の根底」とはドイツ神秘主義思想の底流に属し、ドイツ精神史に多大な影響を与えたものに繋がっている。そして、それはそこから西洋形而上学の根本体制を成す神・世界・人間を再構築する可能性を開いている。例えば、またゲーテはこの決定的経験を『黎明』<sup>78</sup> (1612年) では次のように表現している。

いくばくかの激しい嵐ののち直ちに、私の精神は地獄の門を突破し、神性の最内奥の生誕 (die innerste Geburt der Gottheit) にまで到り、そこであたかも花婿が彼の愛する花嫁を抱くように、愛によって抱き取られた。いかなる勝利の喜びが精神のうちにあったかを私は書くことも語ることもできない。ただ、それは死の只中で生が産まれる場合にのみ喩えられ、死者の復活に匹敵する。この光において私の精神は直ちにすべてを透過した (alsbald durch alles gesehen)。そして、私はあらゆる被造物において、草々においても神を認めた。神が誰で

あり、いかにあり、彼の意志が何であるかを知った。また、かくして直ちにこの光において私の精神は、神の本質を記述したいという大いなる衝動によって膨らんだ。<sup>79</sup>

ここで述べられている①「神性の最内奥の生誕」にまで到り、そこで「愛によって抱き取られた」という体験、②それは「死からの復活」に譬えられ、その照明体験の光において「すべてを透過した」ということ、そしてまたこの光において③「神の本質を記述したいという大いなる衝動」に捉えられたということ、以上には上述したように先ずベーメの生涯にとって決定的なことが含まれている。それは勿論、彼自身が述べているように、当時彼を取り巻き、また彼を追いつ込んだ様々な要因に摑って惹き起こされた彼の個人的煩悶の果てに結果したものであることは疑い得ない。



ゲルリッツ市役所

ただし、同じような状況下に置かれた人間が必ずしも同じ経験をするとは限らないし、むしろあらゆる状況や限定を突破して現前するものに圧倒されるところに、この経験の意義がある。また、それが特殊な条件や限定のもとにのみ生じる出来事であれば、単なる一過性のものに終わってしまう。それが彼の生涯を決定付け、さらにはその後のドイツ精神史上も繰り返し取り上げられる深みを持ちえたということは極めて注目に値する。それは他の神秘主義思想家の思想がそうであるように、その経験が単なる特殊限定的個人的なものに尽きない普遍性を汲み上げる経験であったからである。従って、ここではアンドリュウ・ウィークスの述べるように、ベーメの著作を単なる「忘我的ビジョン (ecstatic vision)」の記録と考える訳ではなく、また彼の思想をすべて「知的に (intellectual)」、歴史的、文化的、環境的文脈から理解しようとするものでもない<sup>80</sup>。ここでは、そういう特殊限定的側面を押さえつつ、その枠を突破するベーメ思想の普遍性に再度回帰する手掛かりをベーメの生涯から取り出すことを目指したい。

以上のような1600年の決定的経験の後もベーメは1613年に製靴台を売却するまで、ゲルリッツで靴屋として生業を営むことになる。1600年当時、ゲルリッツには44の靴屋の仕事場があったと言われており、それは9000人の住民に対して少なからぬ数であり、販売拡張をめぐる争いごともあったようである。ヤーコプ・ベーメの名前もその渦中に見出されている。



ナイセ河に臨む聖ペーター教会

ゲルリッツ市の議事録に拠ると、靴屋は広い販売を確保するために、当時の鞣革組合が提供できるものより多くの革を必要とした。そのため、市は一時的に靴屋が独自に皮を買い取り自家用にだけ鞣すことを許可した。ベーメもこの状況を利用し、皮を自前で買い鞣した。ただ、それを彼が他の靴屋のためにも鞣したということで鞣工に訴えられた。そして、ベーメは他の靴屋のために鞣さず、14日中に6シリングの罰金を払うという条件で放免された。以上のような記録が残されている。<sup>81</sup>

さて1608年、ベーメは現在もナイセ河東岸に残る最初の家を売却している。それは徴税台帳では高く評価されており、結局彼はそれを買った時よりも30マルク高い330マルクで7月26日に売却している。ただ、彼は当面は借家人として家族と一緒にそこに住み続けている。ただし、彼は当時決して困窮していた訳ではなく、1610年にはナイセ河に架かる橋の東門傍にあった家を375マルクで購入している。この場所は、ゲルリッツ市の東の交易路に面し、靴屋の立地条件としては最初の家よりも

ベーメの第二の家<sup>82</sup>



„J. Böhme-Haus“ um 1820

遥かに良かった筈である。この家は、三十年戦争当時、スウェーデン軍に占拠された街に対する皇帝軍とザクセン選帝侯軍による包囲攻撃によって1641年に



はペーメの場合文字通り、行商によって外に出て、人と出会うことによって果たされたと言える。つまり、ペーメの思索は、彼の思索に関心や疑問を抱く人たちとの交流において急展開・成長していったのである。それは主に彼の晩年の手紙や著作に現われるゲルリッツ近郊の地主階級や彼を信奉する下級貴族の人々であった。

その一人が彼の最初の庇護者となったカルル・エンダー・フォン・ゼルヒャ (Karl Ender von Sercha) であった。彼はレオポルトハイン (Leopoldshain) の領主であったと伝えられているが、ペーメの最初の著作、『黎明』は彼の手によって世に出ることになったと言われている<sup>87</sup>。1600年の照明体験、それをペーメは靴屋としての稼業を黙々とこなす一方で、深く掘り下げ続けていたものと思われる。あくまで備忘録であったとペーメは繰り返し述べているのであるが、彼は掘り下げ汲み上げた言葉をペーメ自身の言葉を借りると「ただ自分自身のため、メモのために」<sup>88</sup>稼業の合間に書き留めていたのである。確かに彼の他の著作もいずれも体系的著作ではないが、『黎明』はそれら以上に断片的で彼の体験や認識の諸々の層が折り重なった形で書き綴られている。それが先のゼルヒャの眼に留まり、その写しが先ずは彼の思索に関心を持つ人々の間で回覧されたのである。そして、問題はそれが当時ゲルリッツの首席牧師となっていたリヒターの手に移った時点で大きく転回することになる。



リヒターの住んだゲルリッツの牧師館

ところで、その当該のグレゴール・リヒターは1506年ゲルリッツの鍛冶屋の息子として生まれている。彼はギムナジウム卒業後、1577年にフランクフルト・アン・デア・オーデルで神学の勉強を始めたが、貧窮のため一時中断し、ゲルリッツの資産家ヨハン・エムメリッヒ (Johann Emmerich) の家の家庭教師を勤めた。この資産家の支援を得て、1584年には学業を終えることができ、ゲルリッツのギムナジウムの教師の職を得た。そして、1587年には牧師の資格を得て、1590年にはゲルリッツの聖職者の職に就いた。その職にあって、彼は1592年と1602年には先述したパウツェンでの「隠れカルヴァン主義者」論争における街の代表者の一人として派遣された。そして、1606年にはゲルリッツの首席牧師に選ばれた。ただし、その地位への就任は

余り順調であったとは思われない。というのは、参事会の警告、つまり説教を短くまとめ、語調を和らげるべきである等の警告もあり、また市長スクルテートゥスもリヒターの過度に長い説教について露骨な意見を述べているからである。特に説教壇上の「風紀取り締まり官」としての横暴な発言によって、彼は市民のあいだでの人望を失ったと言われている。<sup>89</sup>

ただ、このリヒターに対する評価は、ベーメとの激しい対決によって後代に極めて不利な内容になっている嫌いがある。リヒターは上述したように苦学の末、その地位を得た者であった。それ故にこそ、彼は必要以上にその得た職務に忠実であろうとしたただけであったとも考えられる。彼は、ベーメの庇護者となったカルル・エンダー・フォン・ゼルヒャとも一時は親交もあり、人文主義的関心をもったゲルリッツの知識人の一人であった。そして、ゲルリッツ参事会も「隠れカルヴァン主義」の嫌疑に超然として立ち向かう者として、首席牧師に彼を任命したのである。先述したように1623年にラウジッツがザクセン選帝侯に皇帝によって戦費支払いの担保として提供された時、リヒターはゲルリッツの教会のザクセンの領邦教会への加入を期待していた。それゆえ彼は街の「隠れカルヴァン主義」の嫌疑を晴らすことを急務と考えた。というのは、1620年に街はカルヴァン主義のイエーゲンドルフ公爵によって一時占拠されたという事実があったからである。彼は激しい反カルヴァン主義の説教によって、これに答えようとしたのである。<sup>90</sup>

上述したように、ベーメが1600年の照明体験以来書き溜めていたメモに関心を示したカルル・エンダー・フォン・ゼルヒャによって、それは初めは彼の仲間の中で書き写され、回覧された。その写しの一つが偶々ゲルリッツの首席牧師リヒターの手に入ったのである。その時点からベーメに対するリヒターの



聖ペーター教会内の説教壇（ゲルリッツ）

執拗なまでの訴追・迫害が始まった。市長スクルテートゥスの当時の日記には、1613年7月26日、靴屋のヤーコプ・ベーメが市庁舎に召喚され、その「熱狂的信仰」について尋問され収監されたこと、そして彼の書いたものが彼の家から取って来られ、二度とこのようなことをしないようにという警告の後、放免されたことが書き残さ

れている。スクルテトゥスは、騒ぎを大きくしないために、その状況下でなしうる極めて賢明で人道的な処置を取った。彼は先述したようにパラケルズ主義者であり、個人的にはベーメの理解者であったと考えられる。<sup>91</sup>

ただし、このような処置に不服であったリヒターは、その次の日曜日にペーター教会の説教壇から「偽預言者」と会衆の前でベーメを辱めた。また、この説教の二日後の7月30日には、リヒターは牧師館で招集された聖職者達の前でベーメを尋問した。ただ、ベーメの非を見つけることはできず、もはや宗教的なことについては書かないという誓約をさせた。そして、ベーメは5年間この誓約を守った。その後の市役所に残る記録では1616年にはベーメは無届けの糸商売で訴追されている。上述したように1613年には靴屋を廃業したベーメは、糸や手袋の行商に転じていたのであるが、この市との彼の最初の著述を巡る対峙の後、その商売の範囲をゲルリッツ外の地域へ移している。1618年にいわゆる三十年戦争が勃発するが、ゲルリッツを含むオーバーラウジツ地方は戦火に巻き込まれることになり、1619年には実際に戦場となる。この前後の時からベーメの著述活動は再開されたと考えられている。<sup>92</sup>

### 第3節 大いなる創造の時代（1618年～1624年）

さて、1618年に勃発した三十年戦争は、その後のベーメの人生および彼の創作活動に決定的影響を与えることになる。1619年にはハプスブルク家の皇帝マティアスが死に、フェルディナント二世がその後継者となる。先述したようにこの時、ベーメン地方ではプファルツ選帝侯フリードリッヒ五世がプロテスタント派の支持を受け、その王座に就き、皇帝側と対峙することになる。このベーメンでの権力交替劇にオーバーラウジツの街々は巻き込まれるのである。職人や農民達は従来の封建的諸関係からの解放を求めて立ち上がった。貴族たちの見解は分かれたが、結局1619年10月にはフリードリッヒ五世の戴冠式に代表団を送ることになった。その同じ時に、ベーメも行商のためプラハに滞在して、このフリードリッヒ五世のベーメン王とし



カレル橋とプラハ城

てのプラハ入城を目撃したのである。

ペーメはこのプラハでの出来事に極めて強い関心を示した。それは、後に冬王と呼ばれることになるフリードリッヒ五世の統治は短期間ではあったが、その間ラウジッツ地方の教会の管轄が不明のままとなったからである。この状況下でペーメは、先の1613年のゲルリッツの参事会と首席牧師リヒターとの約束を踏み越える理由を見出したと考えられる。クリスティアン・ベルンハルトへの手紙のなかでは、ペーメは『エゼキエル書』第38、39章の黙示録的預言に触れ、新たな時代の到来を予感するような口吻で語っている<sup>93</sup>。それは、古い教会の体制は終り、「大いなる新しい改革」が始まるという予感であり、同じ志を持った信頼の置ける集まりを作らなければならないということである。彼は実際貴族や人文主義者たちの仲間に支援を見出し、1618年以来彼等に宛てたたくさんの手紙が残されている<sup>94</sup>。それらは後に「神智学的書簡」として整理される。

このような状況下でペーメは1618年の初め、『三つの原理』<sup>95</sup>の著述に取り掛かり、1619年にはそれを完成している。執筆禁止の命令を受けた1613年とこの執筆を再開した1618年との間にはペーメ自身による証言は僅かしかない。ただ、その間に彼がパラケルズスや錬金術等の思想的遺産と取り組んでいたことは、『三つの原理』以降の著作の内容が示している。1612年にカルル・エンダー・フォン・ゼルヒャによって彼の『黎明』の写しが回覧されることを通して、彼は彼の思想に関心を持つ医者や人文主義者や貴族たちの知己を得ていた。また、行商の旅先で知り合ったシュレージエンの分離派の人々との結びつきも実現していた。ただ、靴匠としての安定した生活は既になく、新たな著作の作成には苦勞している様子が当時の手紙から窺がえる<sup>96</sup>。

さて、1620年9月オーバーラウジッツ地域は、冬王側の軍司令官イエーゲンドルフの部隊によって占拠された。それは皇帝側に与したザクセン選帝侯の軍隊の侵入を未然に防ぐためであった。その戦時下では傭兵部隊の略奪行為や、彼等のもたらした病気の蔓延等もあり、ペーメ自身手紙のなかで「大いなる苦難の年」<sup>97</sup>と述べている。また彼自身も病気になる、本復が難しいということも手紙で述べている<sup>98</sup>。また行商も危険が伴うため儘ならず、生活そのものも危うい状態となった。このような苦難の状況のなかで、ペーメは堰が切られたように執筆活動を続けていった。それは1613年のゲルリッツの参事会と教会当局との約束を破ることであったので、執筆する色々な理由を弁明書や著作の前書き等で繰り返し述べている<sup>99</sup>。また、フランケンベルクもその点に触れ、

神を畏れる人々の勧めで「神の名において」再び筆を取り書き始めたと述べている<sup>100</sup>。ベーメ自身も手紙のなかで「私のうちで高い光が点火され、火の衝動が私を襲った」と書いている<sup>101</sup>。

ところで、以上のように一旦はイエーゲンドルフの軍隊の支配下に入ったオーバーラウジッツ地方も、1620年11月には冬王フリードリッヒが皇帝軍に敗れたことを皮切りに極めて微妙な政治的・宗教的駆け引きの渦中に立たされることになる。すなわち、オーバーラウジッツの街々は、既に第1章の第3節で述べたように、ルター派のザクセン選帝侯とカトリック派の皇帝という敵対する信仰の首長のもとに入ったが、カルヴァン派の冬王側に一旦忠誠を誓ったために、今度はその嫌疑も晴らしながらその權益を守ることを図らなければならなくなったのである。このことがその後のベーメにも重要な影響を及ぼすことになる。その場合の象徴的出来事として挙げられるのは、1621年の8月にゲルリッツに入ったザクセン選帝侯がそこで忠誠の誓いを受け取った時、街の首席牧師であるグレゴール・リヒターが激しい反カルヴァン主義的説教をしたということである<sup>102</sup>。その後のベーメに対するリヒターの執拗なまでの訴追の姿勢は、このような状況下でゲルリッツの首席牧師としての責務に忠実であろうとした結果に他ならないと考えることもできる。

さて、冬王の下で作られたオーバーラウジッツとシュレージエンとの連合体制は、彼の敗北によって脆くも崩れ去った。ただ、オーバーラウジッツ地方が恵まれていたのは、そこがルター派のザクセン選帝侯の支配下に置かれ、反宗教改革の危害を受けないで済んだことである。これに反してベーメン地方は皇帝支配下に置かれ、反宗教改革が残酷な仕方では押し通され、そこから追放された多くの人々はオーバーラウジッツやシュレージエン地方に移住したと言われている。<sup>103</sup>

以上のような三十年戦争下（1618年～1648年）のこの地方の特殊な事情のもとで、ベーメは旺盛な執筆活動を続けることになる。再度時期を遡ってその時々々のベーメの書簡も参考に、その活動を追うと以下ようになる。そこでは周りの不穏な状況のなかでベーメがいかに真摯な創作活動を続けたかが明らかとなる。

先に既に述べた『三つの原理』は、1619年10月にプラハへの行商に出かける前に、同年の1月頃から既に着手され、10月中頃には完成されていたと考えられている。またその作品に続く『三重の生』は、プラハからの帰還の後、1620年の春の終わり頃に完成されたと思われる。1619年11月29日付のカール・

フォン・エンダー宛の手紙には既に「人間の生についての極めて美しい小冊子」という言葉がある<sup>105</sup>。先に述べたようにプラハでの出来事以来ベーメの心は固まっており、もはや彼の創作活動を引き止めるものはなかった。また、この時期にグレゴール・リヒターに対する毅然とした態度の腹も決めたと思われる。

さて、1620年にはインフレや戦争等の色々な原因でベーメを取り巻く状況は益々厳しいものとなった。彼は行商を中止せざるを得ないところへ追い込まれた。その年の11月11日付のクリスティアン・ベルンハルト宛の手紙には、辺境伯イエーゲルンドルフの軍隊が再びゲルリッツに到着し、街の殆どすべての家が宿営所として一杯となったことが伝えられており、「国の半分以上が荒廃し、略奪され、今後どうなるか誰も分らない」と述べている<sup>106</sup>。このような苦境の只中で、その年の5月8日付でアブラハム・フォン・ゾンマーフェルト宛に『汎智学的神秘』<sup>107</sup>を書き送っている。そして、恐らく同じ頃に『六つの神秘的点について』<sup>108</sup>を書き、またバルタザール・ワルター宛には『魂についての四十の問い』<sup>109</sup>を書き送っている。また、さらにはその頃から書き始めた『イエス・キリストの受肉について』<sup>110</sup>を秋頃には完成している。そして、8月14日(および11月19日)にはパウル・カイク宛に『最後の時代についての教え』<sup>111</sup>を書き送っている。このカイクという人は世界の始まりと終わりの年を確定しようとした人であり、ベーメは彼とカスパー・エンダーを通して知り合ったと言われている。彼はまた教会を破壊しようとしていた急進主義者の一人であったが、ベーメはそれ以上のもの、すなわち人間の再生からの新たな時代を欲しており、彼に自分に似通ったものを感じながらも彼の考えに警告を発している。それから、9月にはワルターの強い希望で先の『魂についての四十の問い』を解明するものとして『哲学的球あるいは永遠の不可思議の眼』<sup>112</sup>を書いており、さらにその『四十の問い』の補遺として『翻された眼』<sup>113</sup>を書いている。

次に1621年から1622年はベーメにとって、それまで彼の庇護者であった人々との対決の時期となった。この時の彼の思い(疑いと敵意)は特に『ティルケに対する最初の弁明書』<sup>114</sup>(1621年初め)と『ティルケに対する第二の弁明書』<sup>115</sup>(同年7月)および『エザイア・シュティーフェルの小冊子についての省察』<sup>116</sup>(同年4月)と『シュティーフェルとメッツ派の誤りについて』<sup>117</sup>(1622年4月)の中に現われている。この間、ベーメはシュレージエンへ2回の旅をしている(1621年4月終わりから6月初めまでと1622年4月初めから5月初めまで<sup>118</sup>)。彼等との対決については手紙に詳しく報告されている<sup>119</sup>。1620年頃からベーメの影響は裕福な貴族たちに集中していた。彼らにとって当時問題となっていたの

は信仰告白と政治のもつれから如何に出ることができるかであった。シュレージエンではシュヴェンクフェルトは禁ぜられ、ルターは公式には認められず、カルヴァン派は挫折し、反宗教改革は迫っていた。また、戦争によって国土は荒廃し、反宗教改革によるベーメンからの追放者たちがシュレージエンへ流入していた。この騒然たる状況のなかで、カール・エンダーやアブラハム・フォン・ゾンマーフェルト等はベーメへ接近し、彼の著作のうちに活路を見出そうとしたのである。そこでは宗教的問いは政治的関心に結び付けられており、貴族たちにとって大事であったのは政治的争いからの逃げ道であった。この時期ベーメは各地を旅行し、彼の支持者たちと多くの書簡を交わしている。<sup>120</sup>

1622年の春と夏の間には後に『キリストの道』<sup>121</sup>のうちに収められる四つの小冊子（「真の懺悔について」<sup>122</sup>、「新たな再生について」<sup>123</sup>、「真の放下について」<sup>124</sup>、「超感覚的生について」<sup>125</sup>）が書かれている。また、『大いなる神秘』<sup>126</sup>が書き始められるが、この年の終わり頃シュレージエンへの三回目の旅へ出立している。それはその第一章をシュトリーガウ（Striegau）で提示するためであった。ただ、そこでベーメはこの作品を巡る論争でうまく反論できなかったことを手紙のなかで慣れない食べ物や飲み物を摂ったことによる体の不調の所為にしている<sup>127</sup>。その手紙の相手がアブラハム・フォン・フランケンベルクであったが、彼とは1622年のクリスマスに初めて出会ったと考えられている。また、1621年に書き始められた『万物のしるし』<sup>128</sup>はこの年の2月には完成されている。その他、『神的観照』<sup>129</sup>は9月頃には書き終えている。

第三回目のシュレージエンへの旅で議論された問題に答えるために、ベーメは1623年の初めに『恩寵の選び』<sup>130</sup>を書き始め、2月の初めには完成している。その他、この年の終わりから翌1624年に掛けて沢山の小冊子（『キリストとは何か』、『真実と偽りの光』、『キリストの誓約』、『神的顕示の三つの原理の表』、『鍵』、『三つの論難』、『聖なる洗礼』、『飢え渴く魂』、『照らされた魂と照らされていない魂との会話』、『ゲルリッツ参事会への書状での回答』、『対グレゴール・リヒター』、『神的顕示の観察』、『177の神智学的問い』等）をまとめている。これらの著述の原本をベーメは信頼できる友にのみ貸し与え、またそれを書き写す有能な人々に託し、彼の考えが誤解されず伝わることを願っていたのである。

#### 第4節 最後の年（1624年）

1623年の終わり、匿名の小冊子『キリストへの道』がゲルリッツのヨハン・

ランバウのところで印刷された。その印刷はヨハン・ジギスムント・フォン・シュヴァイニェンによって指示され、資金提供されたものであった。その小冊子に当初収録されていたものは『真の懺悔について』と『真の放下について』である。その著者がヤーコプ・ベーメであることは1624年の3月には突き止められた。この小冊子の出版に対して、グレゴール・リヒターはまさにゲルリッツの首席牧師として激しい追及を始めた。この件に関してはベーメ自身が『ゲルリッツ参事会への書面による釈明』（1624年4月3日付）<sup>131</sup>のなかで詳しく述べている。そのなかでは、彼の最初の本『黎明』は自分の備忘録として書かれたこと、それが彼の意志に反して世に出回り、首席牧師に見咎められ、今後書かないことを約束したこと、そして、その約束を守ったにも拘らず彼のみならず彼の家族まで辱められてきたこと等が書かれている。また、今回の小冊子の印刷に対するリヒターのやり方、すなわちリークニッツ（Lignitz）の仲間と結託して告発したということについても報告している。ベーメはこの小冊子の印刷については予め知っていたが、それを支援したシュレージエンの貴族たちの政治的意図については見抜いていなかった。すなわち、ベーメの言う「大いなる改革」とは飽くまで「霊の生まれ変わり」を核とした改革であったが、彼の庇護者たちにとっては、まさに1620年のヴァイセンベルクの戦いで失った政治的自由を取り戻すということが重要であったのである。ただし、この小冊子の公開が、頑なとなった正統ルター派に満足できなくなった人々を目覚めさせる切っ掛けとなったことは確かである。後に七つの論文によって補完された論集『キリストへの道』は、1628年に作成された版以降、最も多く印刷され、幾世紀にも亘って最も多く読まれるベーメの作品となる。<sup>132</sup>

ところで、この小冊子の発刊が政治的対立も絡む複雑なものとなった経過について、レンパーは以下のように述べている。シュヴァイニェンはその書の印刷許可を彼の住んでいたリークニッツでは得ていたが、刊行地であるゲルリッツの聖職者（その首席であるリヒター）および街の参事会の検閲を受けていなかった。この点が特にリヒターにとってベーメに対する訴えをゲルリッツ参事会で押し通す法的理由となった。それは先の1613年に参事会と聖職者当局によってベーメに課せられた命令違反に当たるものである。この問題はベーメ対リヒターという二人の争いに留まらなかった。そこには鬱積した複雑なものが絡んでいた。そもそもシュヴァイニェンがゲルリッツの印刷業者を選んだという事実が不穏な状況を生み出した。それは結果としてベーメを厳しい立場に立たせることになったのである。小冊子の発刊後直ぐに、ベーメはシュヴァイニ

ヘンの庇護のもと彼の居城シュヴァインハウスへ赴いている。しかし、彼は1624年の3月半ばには自分の家族への心配もあって、ゲルリッツへ戻っている。彼はこの間のゲルリッツの情報を街の医者の特ビアス・コーバーから得ており、責任逃れをせず、戦う決意を固めたのである。<sup>133</sup>

もはやベーメが小冊子の著者であることは疑えなかった。リヒターは彼を「約束を破った異端者」として激しく追及した。ただ、先述したようにリヒターの動機を特にベーメとの個人的敵対関係からのみ判断してはならない。彼にはゲルリッツの首席牧師としての責務があった。当時ラウジッツ地方にはそこを統括する聖職者の役所はなかった。牧師達はそれぞれの町の参事会に属していた。そこでリヒターはベーメを訴追するためリークニッツの牧師フリジウスを必要とした。そうしてリヒターは、ゲルリッツの参事会がフリジウスの訴えを厳格に受け取らないならば重大な間違いを犯すことになるということを示そうとしたのである。その詳しい経過についてレンパーはまた以下のように述べている。

3月23日の参事会の記録には「悪しき腹立たしい教えの様々な訴えのために」ヤーコプ・ベーメを尋問し、ゲルリッツから追放する命令を下すことを決定したとある。それから3月24日の日曜日にはグレゴール・リヒターがベーメを説教壇から「何度も異端者、熱狂者、ならず者」<sup>134</sup>と罵った。このことについてベーメはカルル・フォン・エンデルン宛の手紙では「彼がこうして非常に騒ぎ回るので、尊敬すべき参事会も動かされ、諸氏は（私はある善き友から知らされたのであるが）私を明日参事会へ呼び出し、このような事態についての弁明を求めることを決定した」と述べ、またそのなかで「真理を根本から述べたい」という気持ちや「改革の時が来ている」ということまで書いている<sup>135</sup>。こうして3月26日に参事会で尋問が行われた。その議事録には次のように書かれている<sup>136</sup>。「ヨッヘン・ベーメ、靴屋にして混乱した熱狂者（あるいは夢想家）は次のように語る。彼はその本を永遠の生命のために作成した。彼はそのようなものを印刷させたことはなく、貴族の一人シュヴァインハウスのハンス・ジギスムントが印刷させた。ベーメは参事会によって警告を与えられた。……これに対してベーメはできるだけ早く立ち去ることを約した。」

このようにベーメの召喚の切っ掛けはリヒターとフリジウスの訴えであった。そのため参事会はこの小冊子が印刷されたことが罪であるかどうかを吟味しなければならなくなったが、結局1613年の『黎明』の争いの時と同様の決定を下した。参事会は、尋問を訴えの二つの主要な点、すなわち著者は誰かということと印刷の指示者はだれかということに絞り、それを明らかにした上で

尋問を警告で終わらせた。それは当時の政治的状況を顧慮した判断であった。先述したように当時、ゲルリッツを含むラウジッツ地域は、皇帝の委任を受けたザクセン選帝侯の支配下にあった。ただ情勢はいまだ不透明で、参事会は今後の展開を慎重に見極めねばならなかったのである。ただし、リヒターはこのような参事会の処置に不満であった。それで彼は3月7日付の小冊子『グレゴール・リヒターの裁き』に引き続き、3月26日、27日付の小冊子を作ってベーメを攻撃したのである。リヒターは、ベーメは「熱狂主義者」であり、彼の書いた著作は「神が水銀や硝石から造られた」とする冒涇であると激しく非難した。ベーメもこれに対して文書で弁明をしようとした。実際、その弁明書は1624年4月10日には完成されていたが、参事会は事態を穏便に收拾しようとして、彼の文書での回答を禁じた。<sup>137</sup>

この間の事情についてはベーメのシュヴァイニヘン宛の手紙からも読み取れる<sup>138</sup>。文書での回答は受け取られず、参事会からは街から暫く出ることを勧められた。それは退去命令ではなかったが、リヒターによって扇動された群衆は市庁舎の前に集まり、ベーメを辱めたのである。このような情勢下でベーメはザクセン宮廷の錬金術師ベネディクト・ヒンケルマンを通してドレスデンへ招かれることになるのである。<sup>139</sup>

## 第5節 ドレスデン滞在

さてベーメは、1624年5月5日のクリスティアン・ベルンハルト宛の手紙で次のように書き記している。「次の金曜日、私はドレスデンへ旅立ちます。そこで私は選帝侯の参事会員のところで彼等と話をするように呼び出されています。また宮廷の実験所所長のヒンケルマンとも話をする予定です。」<sup>140</sup>

ところで、このドレスデンへの旅程の交渉はリークニッツの領主ヨハン・ジギスムント・フォン・シュヴァイニヘンと選帝侯の書記局との間でなされたと考えられている。当時、シュヴァイニヘンもその一人であるシュレージェンの諸侯とザクセン選帝侯の間には微妙な外交交渉関係があった。選帝侯は皇帝側からの委任を守りつつも、この地域の「蜂の巣に手を突っ込むこと」を恐れていた。このような情勢下で、ベーメは単なる個人的事情からドレスデンへ赴いたのではなく、シュレージェンのプロテスタント派の貴族からの指示を受けて旅立ったと考えられるのである。そういう周りの情勢とベーメ個人の思いとの間にはかなりの隔りがある。5月9日付のリークニッツの医者フリードリッヒ・クラウゼ宛の手紙には高揚した感情で「今日、5月9日、ドレスデンへ旅

立ちます。・・・』<sup>141</sup>と彼の著作を読んでいる高貴な人々との宮廷での会話を期待する気持ちが綴られている。<sup>142</sup>

さて、その後のドレスデンでの出来事については彼がゲルリッツへ書き送った手紙から推し測ることができる。先ず、5月15日付のトビアス・コーバー宛の手紙には次のように記されている。「・・・ベネディクト・ヒンケルマン氏のところへ着きました。私の到着は彼によってほとんどすべての選帝侯の参事会員に知れ渡りました。彼らは



現在のドレスデンの宮廷

ほとんどみな私の印刷された小冊子を読み、愛し、神の賜物と認めています。・・・これらすべてのことを私は神の定めと認めます。三週間は家に帰ることは難しいでしょう。というのは、私はここで神がいかにかに為し給うかを待たねばならないからです。』<sup>143</sup>

これに続くコーバー宛の彼の手紙の内容も楽観的とも言える期待感に溢れたものとなっている。その期待感には彼が置かれている状況の客観的批判的吟味を妨げているとも言える。ドレスデンの宮廷官吏たちは、シュレージエンやオーバーラウジッツの貴族たちとの駆け引きもあり、一応はベーメと友好的に議論をする必要があった。ただし、彼等には同時に彼の著作を調べるといった任務も持っていた。ベーメはそれをある意味で無邪気に、ここの人々は彼の著作の多くを勉強していると受け取っているのである。<sup>144</sup>

ところで、コーバーはベーメがドレスデン滞在中に彼と彼の家族とを繋ぐ役を担っていたのであるが、彼宛の手紙の中には、この他、一家の長としてのベーメの家族に対する配慮が綴られている。それは、私のことは心配要らない、耐えて満足するように、臆病になることはない、すべては上手く行っている、すべては神の御心であるといった内容のものである<sup>145</sup>。このような手紙の内容の背景にはゲルリッツにいる家族に対して、首席牧師リヒターの追隨者たちが行った嫌がらせがあった。具体的にはベーメの家の窓に投石したということであった。こうして彼自身の思いは希望と疑いとの間を、またドレスデンとゲルリッツとの間を飛び交っている。それはリヒターの誹謗がまだ続くのか、それ

ならば選帝侯に保護を求めたいというものであった。<sup>146</sup>

このような状況のなかで遂に聖霊降臨祭の日曜日（5月26日）の午後、ペーメと選帝侯の官吏や取り巻きの人たちとの間で話し合いの場が持たれた。その様子をペーメはやはりコーバー宛の手紙で伝えているが、それは本格的な論争の場ではなく、予備的なものであった<sup>147</sup>。この話し合いの場で、ペーメはヨアヒム・フォン・ロス（Joachim von Loß）という選帝侯の枢密顧問官に出会っている。彼は後日ペーメを彼の居城に招き、詳しい話を聞いたようである。おそらくロスの任務はペーメおよび彼の信奉者たちがオーバーラウジッツを不穏な状況に陥れるものであるかどうかを調べることにあったと思われる。ただ、ペーメはザクセンの一流の政治家に話を聞いてもらえるということに満足し、リヒターからの誹謗を成り行きに任せる気持ちになったようである。この点はドレスデンからのコーバー宛の第三の手紙に明らかである。そこでは、首席牧師がペーメの小冊子を読む人々をゲルリッツから追い立てるということは起こらないであろうという願望や、「まもなく大いなる改革の時が来るであろう」（傍点筆者）<sup>148</sup>と書かれている。<sup>149</sup>

ただドレスデン滞在中に彼の期待したような「大いなる改革」は起きなかった。6月13日付の手紙ではゲルリッツに残した家族の心配の他に、ドレスデン滞在が間もなく終わるであろうことが述べられている。ペーメがドレスデンへ呼ばれたのは先に述べたようにシュレージエンの貴族たちの仲介によってであった。彼等の最大の関心は、ペーメの思いと違って、選帝侯による統治のあり方であったと思われる。その背景にはこの間のオーバーラウジッツやシュレージエン地域の政治的・宗教的駆け引きがあった。ペーメの著作が書き写され、読まれたのは、彼が信じたようにそれらが愛されたからではなく、それらを吟味するためであった。そして、彼の書いたものが政治的には無害であることが判明した後は、もはやペーメをドレスデンに留める理由はなかった。<sup>150</sup>

## 第6節 ペーメの最後の日々

このようにしてペーメは1624年6月半ば過ぎにゲルリッツへの帰途に就いたと考えられている。彼を訴追し続けたグレゴール・リヒターは8月13日に亡くなったが、その死によってもゲルリッツの教会当局のペーメに対する態度は変わらなかった。また既に数年前から罹患していたペーメの病気は益々進行していた。そのような状況下で、彼は友人の医師であるトビアス・コーバーの忠告にも拘らず、シュレージエンへの最後の旅へ出掛けた。おそらく当地のペーメ

理解者たちの要請もあったと考えられる。その旅の終わりに、ベーメは彼の庇護者の一人であるヨハン・ジギスムント・フォン・シュヴァイニヘンのところに滞在していたが、そこで彼の病状は更に悪化し高熱に襲われた。11月7日彼は、彼自身の願いで、非常に苦しみながらもゲルリッツへ連れて帰られた。その時ちょうど、彼の妻は行商でパウツェンとドレスデンへ出掛けていた。当面の看護はゲルリッツの法律家でベーメの信奉者であるヨハネス・ローテ (Johannes Rothe) が引き受けた。コーバーは、ベーメの信奉者の一人であるチッタウの医師メルヒオール・ベルント (Melchior Bernt) と彼の病状について相談した。また、神秘主義者のクリストフ・コッター (Christoph Kotter) もやって来た。彼等の診立てはベーメの死期が近いということで一致した。そこで、コーバーはベーメに最後の礼典を受けることを勧めた。そして、そのために副牧師エリアス・ディートリッヒ (Elias Dietrich) が呼ばれた。ディートリッヒは11月15日の朝、ベーメの家に入り、死にゆく者をなお信仰上の問いで苦しめた。ただし、この査問をベーメはもはやほとんど理解しなかったと伝えられている。<sup>151</sup>



ベーメの墓に立て掛けられた石板

その後のベーメの様子はフランケンベルクの報告では次のように伝えられている。11月17日の真夜中過ぎ、ベーメは高熱でうつらうつらと時を過ごすうちに「美しい音楽」を聞いた。そして、それをもっと良く聞こうと息子のトビアスにドアを開けるよう言った。午前二時頃、まだ「私の時」ではない、三時間後だと言い、また「御心のままに」と言った。朝六時頃、彼は妻と息子に別れを告げ彼等を祝福し、「さあ、私は天国へゆく」と言った。そして、息子をうしろに向かせ、深く息を吐き安らかに永遠の眠りに就いた。<sup>152</sup>

彼の死因は後の医学的見解からすると肝臓疾患と心臓衰弱であったと推測されている。その後のコーバーの最初の課題はベーメの埋葬の心配であった。というのは、リヒターの後任の首席牧師ニコラウス・トーマス (Nikolaus Thomas) が正式な葬儀を拒んだからである。そこでベーメの死を看取った一人である医師のミヒャエル・クルツ (Michael Kurz) は未亡人の嘆願書をもつ

て市長のもとへ参事会の決断を探るために出掛け、結局、参事会は「異端者」にもまともな埋葬を許可すべきであると議決した。それから副牧師のエアース・ディートリッヒは罪の赦しをベーメに与えたが、なおも追悼説教は拒んだ。そこで再度、参事会は11月18日に未亡人の請願書により説教付きの葬儀を執行させるという議決をしなければならなかった。<sup>153</sup>

ゲルリッツの教会関係者の態度は最後まで頑なであったが、このようにしてようやくベーメはニコライ墓地へ葬られた。また、せっかくコーバーやシュレー



ベーメの墓を覆う石盤

ジエンの信奉者たちによって立てられた十字架の墓碑は、煽動された群衆によって直ぐに汚され引き倒された。言い伝えによると1676年当時には、特別の標もなく、その場所を示すため墓堀人が置いた二三個の大きな石塊があるだけであった。その後、1800年頃、オーバースラウジッツ科学協会の創設者の指示によって、カール・ゴットロープ博士は碑文を刻んだ小さな石板を立てた。また、1869年にはオーバースラウジッツ科学協会はどっしりとした花崗岩の記念碑を建てた。そして、1922年には二人のアメリカ人がその場所を現在も見られるよ

うな碑文と神秘的標を刻んだ大きな花崗岩の石盤で覆った。<sup>154</sup>

このようにして、ベーメはその一生を終えた。それは激しい動乱の時代にあつて、極めて濃縮された生涯であったと言える。特に晩年の数年のうちにベーメが書き残した著述は膨大なものであり、それを短期間のうちに書き上げた彼の思索の集中度、またそれを書き留める彼の真摯さは驚嘆に値する。そして、その間の事情は『神智学書簡』の中に残された手紙のなかでよく見て取れる。すなわち、彼の創作活動は、特に処女作の『黎明』がそうであったように、勿論彼自身の中から溢れ出るものを「火のような衝動 (ein feuriger Trieb)」<sup>155</sup>に駆られて書き留めたものである。そして、その処女作以降の著作においても根本的な著述活動の源泉は同じであり、聖霊の火に点火されたベーメ自身の「内から (von innen)」の魂の発露であった。しかし、それらを書く切っ掛けとなったのは主に彼の友や信奉者たちからの問い掛けであった。従って、それらの問い掛

けに対する真摯な応答の積み重ねが、結果として相当量の著作となったとも言える。ただし、その場合も単なる「外から (von aussen)」の要請によって創作が成されたのではない。そこでの創作活動の内容は、言うならば「外から」と「内から」とが相即するところで成立していると言わざるを得ないようなものである。

彼の書き残した著作、あるいは手紙等には彼の周囲で繰り返される様々な政治的・社会的駆け引きとは一線を画するものを見て取ることができる。その純粹志向性が彼の思索の魅力であり、彼



ペーメの現墓標

が時と処とを超えて注目される所以である。ただし、今回拙論で見てきたように、彼の著述活動は当時の切迫した社会情勢のなかで遂行されたものである。彼を取り巻くある意味で不穏な情勢がなければ彼の創作活動はなかった。また、そのような情勢のなかで周囲の人々からの真摯な問い掛けがなければ、彼の創作活動はなかったと言っても良い。ただし、またそのような「外から」の切迫にも拘らず、彼の創作活動には少しのぶれもない。どのような状況下でも彼の言葉は根源的に同じところから、言わば内の「内から」発せられている。すなわち、彼の発言はどこを紐解いても同じ的を射抜こうとしていると言えるのである。

しかし、彼はただ単に同じことを繰り返しているのではない。ちょうど尽きせぬ泉を無限遡及するように、内へ内へと掘り下げれば掘り下げる程、益々多彩多様な豊かな言葉が彼を通して外へ外へと溢れ出るのである。それはまたちょうど同じ点をぐるぐる廻っているように見えながら、どんどん進展し膨らんでいく螺旋的動きにも譬えられるであろう。彼は書簡のなかでも「出会うものに出会う (was es trift, das trift es.)」<sup>156</sup>という表現をしているが、その「出会い」は極めて偶然でありながら、まさに出会うべくして出会うという根源的必然をも言い当てている。したがって、手紙をも含めた彼の創作活動全体がまさにそういう偶然にして必然であるようなところから性起していると言って良

いであろう。

- 
- <sup>1</sup> Schultz, John: *Jakob Böhme und die Kabbalah*, Peter Lang Verlag, Frankfurt am Main 1993, S.31-34
- <sup>2</sup> Buddecke, Werner: *Jacob Böhme Die Urschriften ,Erster Band*, Friedrich Frommann Verlag, Stuttgart-Bad Cannstatt, 1963, Zweiter Band, 1966  
ebd. *Die Böhme-Handschriften und ihr Schicksal*, The Jakob Böhme Society Quarterly, Bd.1; Nr.4., New York, 1953  
Bonheim, Günter: *Die Böhme-Abschriften, Voraussetzungen und Probleme einer kritischen Edition*, Erkenntnis und Wissenschaft, Jacob Böhme (1575-1624) /Internationales Jacob-Böhme-Symposium Görlitz 2000, Verlag Gunter Oettel Görlitz-Zittau, 2001, S.84-114
- <sup>3</sup> von Frankenberg, Abraham: *De vita et scriptis oder Historischer Bericht von dem Leben und Schriften Jacob Böhmes*, 1651, Sämtliche Schriften, Faksimile-Neudruck der Ausgabe von 1730 in elf Bänden, 1942ff. X
- <sup>4</sup> Jecht, Richard: *Die Lebensumstände Jakob Böhmes*, NLM, 100, 1924
- <sup>5</sup> Lemper, Ernst-Heinz: *Jakob Böhme, Leben und Werk*, Berlin: Union Verlag, 1975  
Weeks, Andrew: *Jakob Boehme, An Intellectual Biography of the Seventeenth-Century Philosopher and Mystic*, State of New York Press, 1991
- <sup>6</sup> Bornkamm, Heinrich: *Luther und Böhme*, Bonn, Marcus & Weber Verlag, 1925  
O. Kile Jr., Frederick: *Die Theologischen Grundlagen von Schellings Philosophie der Freiheit*, Leiden, E.J. Brill, 1965
- <sup>7</sup> Schultz, John: ebd.  
Koyré, Alexandre: *La Philosophie de Jacob Boehme*. Paris, These, 1929  
Ebd., *Mystiques, spirituels, alchimistes du X VI siècle allemande*, Schwenckfeld, Seb. Frank, Weigel, Paracelse, Paris, A. Colin, 1995、鶴岡賀雄訳：『パラケルススとその周辺』書肆風の薔薇、1987参照。
- <sup>8</sup> Bailey, Margaret: *Milton and Jacob Böhme*, New York, Haskell House, 1964  
Ederheimer, Edger: *Jakob Böhme und die Romantiker; Jakob Böhmes Einfluß auf Tieck und Novalis*, Heidelberg, Winter, 1904  
Feilchenfeld, Walter: *Der Einfluß Jakob Böhmes auf Novalis*, Berlin, Ebering, 1992
- <sup>9</sup> Brown, Robert: *The later Philosophy of Schelling, The influence of Boehme on the works of 1809-1815*, London, Associated University Presses, 1977

<sup>10</sup> Benz, Ernst: Die schöpferische Bedeutung des Wortes bei Jakob Böhme, *Eranos Jahrbuch* 39, 1970

<sup>11</sup> 以上、『シェリング年報』第5号56頁から65頁、拙論「ヤーコプ・ベーム研究の現状について」参照

<sup>12</sup> Weeks, Andrew: ebd., Preface

ウィークスはベームの作品を、徹底してそれが書かれた環境、その人生と時代との関連において、「知的に (intellectual)」解明しようとしている。

<sup>13</sup> 以上、『山口大学哲学研究』第11巻所収、拙論「神の戯れ～ヤーコプ・ベームの神～」、『山口大学哲学研究』第12巻所収、拙論「神の大いなる戯れ～ヤーコプ・ベームにおける『創造』の問題～」及び『山口大学哲学研究』第14巻所収、拙論「神の道具～ヤーコプ・ベームの人間観～」参照。

<sup>14</sup> Böhme, Jacob: *EPISTOLAE THEOSOPHICAE, oder Theosophische Send=Briefe, Sämtliche Schriften*, Faksimlie-Neudruck der Ausgabe von 1730 in elf Bänden, 1942ff. 以下、この全集からの引用は巻数のみを記す。

<sup>15</sup> Jecht, Richard: ebd., S.179

<sup>16</sup> ebd.,S.180

レンパー博士は著者がゲルリッツを訪ねた折に様々な研究の便宜を図って頂いた方であったが、残念ながら一昨年（2007年）訃報が届いたばかりである。



レンパー博士遺影（2003年、ゲルリッツの博士の自宅にて）

<sup>17</sup> 今井晋：『ルター』人類の知的遺産26、講談社、1982年、88-91頁参照。

<sup>18</sup> リヒャルト・フリーデントール：『マルティン・ルターの生涯』笠利尚、徳善義和、三浦義和訳、新潮社、1937年、149頁参照。

- <sup>19</sup> 今井晋：『ルター』97頁
- <sup>20</sup> 松田智雄責任編集：『ルター』世界の名著18、「農民戦争文書」263頁から332頁参照。
- <sup>21</sup> 金子晴勇：『ルターとドイツ神秘主義』創文社、2000年、345頁から362頁参照。
- <sup>22</sup> Lemper, Ernst-Heinz: *Jakob Böhme*, S.10
- <sup>23</sup> ebd.
- <sup>24</sup> Böhme, Jacob: *Theosophische Send=Briefe*, XXI, S.242
- <sup>25</sup> 『山口大学哲学研究』第14巻所収、拙論「神の道具～ヤーコプ・ペーメの人間観～」参照。
- <sup>26</sup> Lemper, Ernst-Heinz: ebd., S.13-16
- <sup>27</sup> Jecht, Richard: ebd., S.228
- <sup>28</sup> Lemper, Ernst-Heinz: ebd., S.24  
イェヒトの研究の成果としてレンパーは次の四つの問題領域を挙げている。すなわち、  
①靴匠から行商人への変化、②パラケルズ主義と彼の精神的連関、③彼の地方貴族との関係、④オーバーラウジッツにおける宗教改革の帰結との彼の対決である。
- <sup>29</sup> Böhme, Jacob: *Sämtliche Schriften*, XXI
- <sup>30</sup> Lemper, Ernst-Heinz: ebd., S.21-22
- <sup>31</sup> Jecht, Richard: ebd., S.194
- <sup>32</sup> Lemper, Ernst-Heinz: ebd., S.26  
『世界各国史3 ドイツ史』山川出版、林健太郎編、昭和60年、161、185～187頁参照。
- <sup>33</sup> Lemper, Ernst-Heinz: ebd., S.27-28  
Jecht, Richard: ebd., S.200-201
- <sup>34</sup> Lemper, Ernst-Heinz: ebd., S.30
- <sup>35</sup> ebd., S.31および上掲の『パラケルスとその周辺』11頁から56頁参照。
- <sup>36</sup> ebd., S.33-34
- <sup>37</sup> 『世界各国史3 ドイツ史』192～193頁
- <sup>38</sup> 同上、192～197頁
- <sup>39</sup> Böhme, Jacob: *Theosophische Send=Briefe*, XXI, S.16
- <sup>40</sup> Lemper, Ernst-Heinz: ebd., S.34-35  
Jecht, Richard: ebd., S.201
- <sup>41</sup> Lemper, Ernst-Heinz: ebd., S.35-36
- <sup>42</sup> ebd., S.36-39
- <sup>43</sup> ebd.
- <sup>44</sup> ebd., S.30
- <sup>45</sup> Jecht, Richard: ebd., S.199

- <sup>46</sup> Lemper, Ernst-Heinz: ebd., S.37-39
- <sup>47</sup> ebd., S.31-32
- <sup>48</sup> ebd., S.39-41
- <sup>49</sup> ebd., S.42-44
- <sup>50</sup> von Frankenberg, Abraham: ebd., S.14
- <sup>51</sup> Lemper, Ernst-Heinz: ebd., S.44-45  
von Frankenberg, Abraham: ebd., S.15
- <sup>52</sup> ベーメの生涯とその思想形成については既に福島正彦氏による研究がある。著者も今回、ベーメの思想と生涯をまとめるに当たって、逐一記さなかったが、氏の先行研究を参照した。福島正彦著『ベーメ倫理思想の研究』松籟社、1985年参照。
- <sup>53</sup> ベーメの誕生年の確定に関しては、彼の最初の著作『黎明』の表題の横に書き入れられた「1612年、彼の37歳の年」に拠る（エルンスト・ハイネツ・レンパー）。
- <sup>54</sup> Jecht, Richard: ebd., S.194
- <sup>55</sup> von Frankenberg, Abraham: ebd., S.6
- <sup>56</sup> ebd., S.7
- <sup>57</sup> ebd., S.9-10
- <sup>58</sup> Weeks, Andrew: ebd., S.16
- <sup>59</sup> Adler, Curt; *Zur Feststellung der Geburtsstätte Jakob Böhmes in Alt-Seidenberg*. Neues Lausitzisches Magazin 100. 1924, Zeitschrift der Oberlausitzischen Gesellschaft der Wissenschaften. Görlitz
- <sup>60</sup> Jecht, Richard: ebd., S.188, 192  
Lemper, Ernst-Heinz: ebd., S.50-51
- <sup>61</sup> Adler, Curt; ebd., S.5
- <sup>62</sup> Jecht, Richard: ebd., S.192
- <sup>63</sup> Lemper, Ernst-Heinz: ebd., S.51
- <sup>64</sup> Jecht, Richard: ebd., S.188参照
- <sup>65</sup> von Frankenberg, Abraham: ebd., S.10
- <sup>66</sup> ebd., S.8-9
- <sup>67</sup> Jecht, Richard: ebd., S.193
- <sup>68</sup> 修業遍歴は勿論靴屋としての技能を磨くということが第一の目的であるが、他方ではゲーテのウィルヘルムが言うように「見るために、考えるために」旅に出るという意味合いが強いものである。ヨハン・ヴォルフガング・ゲーテ作、関泰祐訳『ウィルヘルム・マイステルの遍歴時代』岩波文庫、昭和49年、146頁参照

福島正彦著、『ペーメ倫理想の研究』27頁参照

<sup>69</sup> von Frankenberg, Abraham: ebd., S.8

<sup>70</sup> Böhme, Jacob: *Theosophische Send=Briefe*, XXI, S.118

<sup>71</sup> Jecht, Richard: ebd., S.194

<sup>72</sup> ebd., S.190-191

<sup>73</sup> Jecht, Richard: ebd., S.188-190

Lemper, Ernst-Heinz: ebd., S.59

<sup>74</sup> Böhme, Jacob: *Theosophische Send=Briefe*, ebd., S.233-234, 242

Lemper, Ernst-Heinz: ebd., S.100-101

<sup>75</sup> Grunsky, Hans; *Jacob Böhme*, Stuttgart, frommann-holzboog, 1984, S.22-23

<sup>76</sup> Böhme, Jacob: *Theosophische Send=Briefe*, XXI, S.44

<sup>77</sup> von Frankenberg, Abraham: ebd., S.10-11

<sup>78</sup> Böhme, Jacob: *Aurora, Morgenröthe im Aufgang*, I

<sup>79</sup> ebd., S.266

<sup>80</sup> Weeks, Andrew: ebd., S.3

<sup>81</sup> Lemper, Ernst-Heinz: ebd., S.54 - 55

記録に拠ると鞆工にも同姓同名のヤーコプ・ペーメがいたようで、この間の記録には若干曖昧な点が残る。

<sup>82</sup> Heinz Fietze: *Jacob Böhme, Stationen seines Lebens*, Schumacher und Philosoph, 1575-1624,

Gunter Dünnbier, Görlitz, 2003, S.11

ゲルリッツ東門傍にあったペーメの家。1820年当時の貴重な写真。



„J. Böhme-Haus“ um 1820



- <sup>83</sup> ebd., S.61
- <sup>84</sup> ebd., S.54-55, 61-62
- <sup>85</sup> Jecht, Richard: ebd., S.197-198
- <sup>86</sup> Lemper, Ernst-Heinz: ebd., S.64
- <sup>87</sup> Jecht, Richard: ebd., S.200
- <sup>88</sup> Böhme, Jacob: *Theosophische Send=Briefe*, XXI, S.30
- <sup>89</sup> Lemper, Ernst-Heinz: ebd., S.64-65
- <sup>90</sup> ebd., S.66
- <sup>91</sup> ebd., S.67-68
- <sup>92</sup> ebd., S.68
- <sup>93</sup> Böhme, Jacob: *Theosophische Send=Briefe*, XXI, S.16-17
- <sup>94</sup> Lemper, Ernst-Heinz: ebd., S.71-72
- <sup>95</sup> Böhme, Jacob: *De Tribus Principiis, Beschreibung der Drey Principien Göttliches Wesens*, II
- <sup>96</sup> Böhme, Jacob: *Theosophische Send=Briefe*, XXI, S.5
- <sup>97</sup> ebd., S.99
- <sup>98</sup> ebd., S.98
- <sup>99</sup> Böhme, Jacob: *Apologia contra Gregorium Richter*, XII, S.396  
 ebd., *De Tribus Principiis*, S.8
- <sup>100</sup> von Frankenberg, Abraham: ebd., S.11
- <sup>101</sup> Böhme, Jacob: *Theosophische Send=Briefe*, XXI, S.1
- <sup>102</sup> Lemper, Ernst-Heinz: ebd., S.75
- <sup>103</sup> ebd., S.76
- <sup>104</sup> Böhme, Jacob: *DE Triplici Vita Hominis, Vom dreyfachen Leben des Menschen*, III
- <sup>105</sup> Böhme, Jacob: *Theosophische Send=Briefe*, XXI, S.20
- <sup>106</sup> ebd., S.253
- <sup>107</sup> ebd., *Mysterium Pansopicum. Vom Irdischen und Himmlischen Mysterio*, VIII
- <sup>108</sup> ebd., *Sex Puncta Mystica, Von sechs Mystischen Punkten*, VII
- <sup>109</sup> ebd., *Psychologia Vera cum Supplemento, Viertzig Fragen von der Seelen*, IV
- <sup>110</sup> ebd., *De Incarnatione Verbi, Von der Menschwerdung JESUS Christi*, V
- <sup>111</sup> ebd., *Informatorium Novissimorum, Unterricht von den letzten Zeiten*, XIII
- <sup>112</sup> ebd., *Die Philisophische Kugel oder das Wunder-Auge der Ewigkeit*, IV, S.106-183
- <sup>113</sup> ebd., *Psychologiae Supplementum, Das Umgewandte Auge*, IV, S.179-184
- <sup>114</sup> Böhme, Jacob: *Apologia I, Contra Balth. Tilken, Die erste Schutz=Schrift wieder Balthasar*

Tilken, X, S.1-100

- <sup>115</sup> ebd., *Apologia II, Contra Balth. Tilken, Die zweyte Schutz=Schrift wieder Balthasar Tilken*, X, S.101-164
- <sup>116</sup> ebd., *Anti-Stiefelius, Bedenken über Esaia Stiefels von Langen=Saltza Büchlein*, XI
- <sup>117</sup> ebd., *Anti-Stiefelius II, Vom Irrthum der Secten Esaia Stiefels und Ezechieh Meths*, XI
- <sup>118</sup> Grunsky, Hans; ebd., S.310
- <sup>119</sup> Böhme, Jacob: *Theosophische Send=Briefe*, XXI, 61-77
- <sup>120</sup> Lemper, Ernst-Heinz: ebd., S.77-80
- <sup>121</sup> Böhme, Jacob: *Christosophia, Der Weg zu Christo, Sämtliche Schriften IX*
- <sup>122</sup> ebd., *De Poenitentia Vera, Von wahrer Busse*, Sämtliche Schriften IX, S.1-42
- <sup>123</sup> ebd., *De Regeneratione, Von der neuen Wiedergeburt*, IX, S.109-142
- <sup>124</sup> ebd., *De Aeqanimitate, Von der wahren Gelassenheit*, IX, S.85-108
- <sup>125</sup> ebd., *De Vita Mentali, Vom übersinnlichen Leben, im Gespräch eines Meisters und Jüngers*, IX, S.143-164
- <sup>126</sup> ebd., *Mysterum Magnum, Erklärung über das Erste Buch Mosis*, XVII
- <sup>127</sup> ebd., *Theosophische Send=Briefe*, XXI, 143
- <sup>128</sup> ebd., *De Signatura Rerum, Von der Geburt und Bezeichnung aller Wesen*, XIV
- <sup>129</sup> ebd., *Theosopia, Von Göttlicher Beschaulichkeit*, IX, S.165-200
- <sup>130</sup> ebd., *De Electione Gratiae, Von der Gnaden=Wahl*, XV
- <sup>131</sup> Böhme, Jacob: *Apologia*, X, S.394-398
- <sup>132</sup> Lemper, Ernst-Heinz: ebd., S.86-87
- <sup>133</sup> ebd., S.88-89
- <sup>134</sup> Böhme, Jacob: *Apologia*, X, S.397
- <sup>135</sup> Böhme, Jacob: *Theosophische Send=Briefe*, XXI, S.212
- <sup>136</sup> Jecht, Richard: ebd., S.215
- <sup>137</sup> Lemper, Ernst-Heinz: ebd., S.91-97
- <sup>138</sup> Böhme, Jacob: *Theosophische Send=Briefe*, XXI, S.212-216
- <sup>139</sup> Lemper, Ernst-Heinz: ebd., 96-97
- Böhme, Jacob: *Theosophische Send=Briefe*, XXI, S.215
- <sup>140</sup> Böhme, Jacob: *Theosophische Send=Briefe*, XXI, S.225
- <sup>141</sup> ebd., S.230-231
- <sup>142</sup> Lemper, Ernst-Heinz: ebd., S.98-99
- <sup>143</sup> Böhme, Jacob: *Theosophische Send=Briefe*, XXI, S.232

- <sup>144</sup> ebd., S.236
- <sup>145</sup> ebd., S.233
- <sup>146</sup> Lemper, Ernst-Heinz: ebd., S.104  
福島正彦『ペーメ倫理想の研究』77頁参照
- <sup>147</sup> Böhme, Jacob: *Theosophische Send=Briefe*, XXI, S.239-240
- <sup>148</sup> ebd., S.241-242
- <sup>149</sup> Lemper, Ernst-Heinz: ebd., S107
- <sup>150</sup> ebd., S.110
- <sup>151</sup> ebd., S.110-111  
福島正彦著、同上78頁参照
- <sup>152</sup> von Frankenberg, Abraham: ebd., S.21
- <sup>153</sup> Lemper, Ernst-Heinz: ebd., S.111
- <sup>154</sup> Jecht, Richard: ebd., S.228-229
- <sup>155</sup> Böhme, Jacob: *Theosophische Send=Briefe*, XXI, S.45
- <sup>156</sup> ebd., S.31, 40